

Update Information:

2026/05/06/ 1:11 AM

◆各話へのクイックリンク。

[□ 第一話](#)

[□ 第二話](#)

[□ 第三話](#)

[□ 第四話](#)

Copyright@2026 D<sup>3</sup>S

設定資料

「私が工業高校に進学した理由 一学期」

～前編～

夢雄 美侶

設定資料

タイトル

全体あらすじ

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

※前編 第一話 から 第四話 まで

※後編 第五話 から 第八話 まで（予定）

工業高校に入学した、超変態女子高校生 夢前 美優の周りで起こる  
ドタバタ学園コメディ

中学二年生の時、姉の部屋で偶然見つけた、大人への扉の本。

大人への世界に関心をもち、立派は痴女に成長します。

圧倒的な男子生徒数の工業高校には、男子が好きな男子、男子生徒が好きな男性教師  
がいたり、刺激がいっぱい 危険がいっぱい

変態、痴女、BL、TL ときどき、シリアス 何でもありの まさに、  
エンターテイメント。

シリーズ構成

・「私が工業高校に進学した理由 一学期」

★本作 ・「私が工業高校に進学した理由 二学期」

・「私が工業高校に進学した理由 三学期」

記号

本作のみ登場人物

登場人物

主人公

□ 第○幕 サブタイトル  
○ 場所  
▽ ト書き

白井 幸子（しらい さちこ）

智美 中学時代のクラスメートで、智美を虐めていた

※ 登場人物は、共通です ※

夢前 美優（ゆめさき みう）

高校一年生、（増本中学校出身）

成績は普通

ブラスバンド部に「入っており、中学ではトランペット、  
高校ではクラリネットを担当している

人前ではウヴな振りをしているが、内面は超エロエロ

ひとつ ひとよりエロが好き

ふたつ ふふふ とスケベ心

みつつ 見たくてたまらない

高谷 智美（たかたに ともみ）

高校一年生

野球部マネージャー

三人の中では背も高くおしやれ

みんなの前では経験済みの振りをしているが、実は経験無し

中学時代は、虐められていた

※智美の過去は二学期編で明かされる

中川 松子（なかがわ まつこ）

高校一年生（辺富中学校出身）

吉賀に恋する乙女

成績優秀

大学へ進学するためにカメラ屋でバイトをしている

同じ中学校の出身に小島がいる

小村

健一（こむら けんいち）

高校一年生（増本中学校出身）

イケメンで、女子にもてる要素をもちながらも、すごく純粋で  
世間知らずなところあり。

吉賀 達郎（よしが たつお）

高校一年生

身長 160センチ 体重48キロ 華奢で色白

カリブ海に浮かぶ小国の外交官の息子

海外生活のため、露出など気にならない性格

小村のことが好きである

松村 純（まつむら じゅん）

高校一年生

身長161センチ 体重52キロ

普段は黒縁メガネをかけている

水泳部に所属している

根暗で温和しい性格

実は、服を脱ぐと、見事な筋肉質の肉体を持ち、ボクシング、空手、

などを会得し 喧嘩はかなり強い

※松村の過去は第三部で判明

夢前家

郊外の住宅地に住んでいる  
二階建ての一軒家 よくある注文住宅  
美優、美穂の部屋が二階にある

父 (現時点・無名)

普通のサラリーマン40代

コンピュータ関係の仕事をしており、ITに長けている

母 (現時点・無名)

姉 美穂(みほ) 美優の二歳年上

秀才で成績は常にトップ

※中学までは、それほど成績はよくなく、中学のある出会いから  
猛勉強し超難関国立大学に自宅から通っている

そのためか おしゃれに疎くすっぴんで、服もシンプル

小村家

郊外の住宅地に住んでいる

二階建ての一軒家 よくある注文住宅

父 浩太郎(こうたろう) 四十四代

ごくごく普通の会社でサラリーマンをしている  
しかし、裏では絶大な人気を誇るアダルト小説を書いており  
稼いでいる。家族にはまったく知られていない。

母 (現時点・無名)

妹 明日美(こむら あすみ) 健一の一つ下

### 吉賀家

代々カリブ海に浮かぶ小国の外交官をしている

祖父 (現時点・無名)

父 (現時点・無名)

母 遥(はるか)

### 中川家

祖母 (現時点・無名)

日本海の海岸近くに住む

実は大地主

### 小島家

郊外の住宅地に住んでいる

二階建ての木造建築

小島の部屋二階の和室

隣が姉（優子）の部屋

優子は、二年生で出演

クラスメイト

★主要人物

☆準主要人物

出席番号

1 足立（あだち）

2 井口（いぐち）

喧嘩ばやい正確をしている

3 池田（いけだ）

小島の仲間

4 石井 益太（いしい ぼんた）

通称 ボンソワール

Copyright@2026 D's

☆

1  
2

小島

智 (こじま とも)

二次元萌えキャラ大好き

好きな色は ピンク

しかし。二次元キャラに飽き足らず、カワイイ男の子  
吉賀、松村のことも狙っている

姉 (優子) がおり、美優の姉と同じ大学に通っている

1  
1

木高

(きだか)

1  
0

桂川

(かつらがわ)

9

柿本

(かきもと)

8

尾方

(おがた)

7

太田

(おおた)

6

遠藤

(えんどう)

5

岩山

(いわやま)

Copyright © 2026 D's

★

13

小村

健一（こむらけんいち）

14

塩屋

（しおや）

小島の仲間

15

柴山

（しばやま）

16

白石

（しらいし）

17

高石

（たかいし）

☆

18

滝本

恵（たきもとけい）

元々、美優、小村と同じ中学出身

がっちりした体格で、高校ではラグビー部に所属

二部の文化祭で、年上のAV女性に好意を持ち、

クリスマスに関係を持ってしまう。

そしてAV女性が、小村の父親と知り合いであり、

滝本にはバレてしまう

19

谷田

（たにだ）

クラスではイケメンボーイで もてる容姿をしている

いつも中林と連んでいる

---

29	28	27	26		25	24	23	22	21	20
新田	永江	中山	中林		中野	中谷	中尾	豊崎	手柄	津世
(にった)	(ながえ)	(なかやま)	(なかばやし)		(なかの)	(なかたに)	(なかお)	(とよさき)	(てがら)	(つせ)

身長が高い  
小村と同じバスケット部に所属

Copyright © 2026 D<sup>3</sup>S

---

---

★	★	★	★	★						
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30
夢前	中川	高谷	吉賀	松村	福山	福井	百部	広瀬	八木	野村
美優	松子	智美	達郎	純	俊雄	良樹	(ひやくべ)	(ひろせ)	(やぎ)	(のむら)
(ゆめさき)	(なかがわ)	(たかたに)	(よしが)	(まつむら)	(ふくやま)	(ふくい)				
みう)	まつこ)	ともみ)	たつお)	じゅん)	としお)	よしき)				

---

教師

地名など

竹田（たけだ） 50代

クラスの担任で、てっぺんハゲがあることから、入学早々からザビエルとあだ名を付けられる  
見た目と違い、生徒思いの良い先生である

☆ 土呂（とろ） 40代

保健体育担当

ゲイであり、男子生徒の股間を触るのが生きがい

落合（おちあい） 男 五十代

工業化学科の教員

山田（やまだ） 女 四十代

工業化学科の教員

姫磨工業高等学校（ひめまろこうぎょうこうつうがっこう）

美優達が通う高校

県立高校であり

一組・デザイン科  
二組・工業化学科  
三組・電気科  
四組・機械科  
五組・溶接科  
六組・情報処理科  
で構成される。

各科ごとに校舎がわかれており、敷地はかなり広い  
シャワー室を備えた部活棟があり、二十五メートルの屋外プールを備える

## クラブ活動

男子生徒が大半を占めているため、女子はマネージャーとなることが多い

- ・吹奏楽部
  - ・バスケットボール部
  - ・ラグビー部
  - ・山岳部
  - ・野球部
  - ・陸上部
  - ・水泳部
- 県内一の実力があり数々の大会で優勝している

○夢前家

若松町

○小村家

○吉賀の住むタワーマンション

新增山（しんますやま レジデンス）

五十階建ての構想マンション 最上階に吉賀が住んでいる

Copyright@2016 D<sup>3</sup>S

目次

目次

設定資料	3
全体あらすじ	3
シリーズ構成	3
記号	4
本作のみ登場人物	4
登場人物	4
主人公 夢前 美優（ゆめさき みう）	4
主要人物	6
クラスメイト	9
教師	14
地名など	14
目次	17
第一話	24
サブタイトル「二学期がはじまるよ」	26

本話について	26
あらすじ	26
登場人物（本話のみ）	26
□ 第一幕 今日から二学期	27
○（朝）夢前家 玄関	27
○ 通学路	27
○ 県立姫磨工業高校の校門近く	28
○ 一年二組の教室	30
□ 第二幕 小島 再び	33
○（放課後）部活の時間 プールサイド	33
○ プールの機械室	35
第二話	43
サブタイトル「体育祭がはじまるよ」	44
本話について	44
あらすじ	44
登場人物（本話のみ）	44
□ 第一幕 体育祭準備委員会	45

○ある日の体育の授業 運動場にて	45
○（その日の放課後）生徒会室	46
第二幕 土呂の家での出来事	48
○（数日後の放課後）生徒会室	48
○（夜）土呂が住んでいるマンション	49
○（夜）帰り道	64
←# インサート # ← 土呂の家	67
→# インサート # →	67
←# インサート # ← 土呂の家	68
→# インサート # →	68
（数分後）	68
○美優の家の前	69
○夢前家	70
○美優の部屋	70
□第三幕 体育大会	72
○（土曜日）姫磨工業高校の運動場	72
○学校の運動所 前方の本部テントの記録係の席	72

第三話	81
サブタイトル「文化祭の準備をはじめよう」	82
本話について	82
あらすじ	82
登場人物（本話のみ）	82
□ 第一幕 美魔女達の巣窟	83
○（夕方）一年二組の教室	83
← ERO MODE ← #吉賀&小村	87
← # インサート # ← 大倉が廊下を歩くシーン	89
→ # インサート # →	89
○（次の日の放課後）学校の廊下	90
○デザイン科校舎の二階の突き当たり 第一美術室	91
（美術室の見取り図）	91
→ ERO MODE →	112
□第二幕 2回目打ち合わせ	113
○（翌週の放課後）デザイン科棟へ向かう廊下	113
□第三幕 打ち合わせ最終日	129

○（翌日）文化祭の日	150
第四話	152
サブタイトル「文化祭が始まるよ」	153
本話について	153
あらすじ	153
登場人物（本話のみ）	153
□第一幕 今日文化祭	154
○（文化祭の朝）姫磨工業高校 工業化学科の実習棟	154
○一階の実習室の横の準備室	154
○女子更衣室	156
○工業化学科実習棟 入口付近	159
○一階 実習室	160
□第二幕 # おばちゃん二人 VS 小村 #	162
○工業化学科実習棟 前	162
○おばちゃん二人組のテーブル	163
○実習準備室	166
□第三幕 # おばちゃん二人 VS 松村 #	168

○おばちゃん二人組のテーブル	168
○準備室	170
□第四幕 # 青年 VS 滝本 #	172
○六番テーブルの席	172
○（数時間経過）昼過ぎの 第一実習室	175
□第五幕 # おばちゃん四人組 VS 吉賀 #	178
○第一実習室（今は、喫茶店）	178
○第一実習室の扉	179
○おばちゃん四人組の席	183
□第六幕 滝本と小雪の出会い	206
○準備室	206
□第七幕 ついに吉賀と松子が	218
○部活棟のシャワールーム	218
（数分後）○第一実習室	222
後編へ続く	225

---

Copyright@2026 D<sup>3</sup>S

---

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

# 第一話

夢雄  
美侶

---

Copyright@2026 D<sup>3</sup>S

---

---

サブタイトル「二学期がはじまるよ」

本話について

あらすじ

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D<sup>3</sup>S

---

□第一幕 今日から二学期

○（朝）夢前家 玄関

▽美優 玄関で靴を履いている

後ろで母が見守っている

「行ってきます」

「いってらっしゃい。車に気をつけるんですよ」

「はい」

（もう、お母さんたら、いつまで子供って思ってるのかしら）

○通学路

生徒達が通学路を歩いたり、自転車を通っている

▽美優 通学路を歩きながら、ハンカチで額の汗を拭く

「まだまだ、暑いわね。汗かいちゃう」

美優

（美優）

美優

母

美優

美優

「でも、そんな暑い日だから、楽しみもあるのよね。ウフフ」

○県立姫磨工業高校の校門近く

▽生徒達 校門に立っている教師に挨拶をしながら教室に入っていく

▽美優 反対側からやってくる 滝本と目が合う

▽滝本 美優に気づき挨拶をする

滝本

「夢前さん、おはよう」

美優

「おはよ。滝本くん。元気だった」

▽滝本 滝本は素肌の上にカッターシャツを着ているので、汗でワイシャツが濡れ乳首が透けてみえている

▽美優 滝本の胸を見る

(美優)

(わ！ 滝本くん シャツが透けて、ビーチクくつきり！  
だから、夏はこれが たまんねえよ)

滝本

「おう、部活の毎日だったけどな。夢前も部活がんばってたじゃないか」

美優

「ありがとう。今日から またがんばろうね」

滝本

「じゃ、教室で」

▽滝本 先に校門を抜け、教室に向かう

▽小島 通学してきて、美優の後ろ側から声をかける

小島

「よ！ 変態女」

▽美優 振り向く 小島がいる

小島も汗でカッターシャツが素肌に張り付いているが黒く見える

美優

「何よ！ ロリータ小島！」

(美優)

(げ！ 小島の बीचクを見てしまった。なんか黒いよ  
乳毛が生えてるのか。キモお。早く、お口直しを見なくちゃ)

(ナレーション)

(てな、感じで、2学期がスタートです)、

〇一年二組の教室

松子は自席に座ってスマートフォンを触っている

▽美優 教室に入ってくる

「おはよ」

「ひさしぶりい」

「美優、会いたかったよお」

「なんてね、しょっちゅう ツナグ（こちらの世界で流行っている SNS の名前）してるから、感動が薄いわよね」

「そう？ ツナグじゃ、美優のカワイイ声 聞こえないじゃん」

▽智美 教室に入ってくる

「おっはよう」

「ともみい。相変わらず綺麗だよ」

松子

美優

松子

美優

松子

智美

美優

(美優)

智美

(フィリピンで整形したぐらい綺麗だよ)  
「わあ、松子、美優 おひさあ」

▽智美 自分の席に向かう

途中 松村の席を通り過ぎる

▽松村 自席に座って本を読んでいる

智美

「松村君、おはよ」

▽松村 顔をあげる

松村

「お、おはよ」

智美

「松村君 かつこよかったわ」

▽智美 自席にカバンを置き、美優の席の方に行く

松子

「ねね、今、松村君に何か言ったの？」

智美

「なんでも無いわよ」

松子

「怪しいなあ。海で、結構二人いい線いってたじゃん」

Copyright@2026 DIS

□ 第二幕 小島 再び

○（放課後）部活の時間 プールサイド

▽松村 上半身はTシャツ 下半身は競泳水着姿で、

コースロープを敷いている

▽小島がやってくる

「今日も一人でロープ張りか」

「一年生は、僕しかないからね」

▽松村 Tシャツを脱ぐ

「あいかわらず良い体してるよな」

▽松村 ロープを張るためにプールに入る

▽小島 松村を見ている

▽松村 コースロープを張り終え、プールサイドに上がってくる

小島

松村

小島

小島

「おつかれ」

▽小島 松村にバスタオルを渡す

▽松村 ゴーグルを外しバスタオルを受けとる

松村

「ありがとう。いつものことだから慣れたよ」

小島

「松村、夏休み 俺に会えなくて寂しかったんじゃないか」

松村

「そんなことないよ」

小島

「なあ、久しぶりに 抜いてやろうか」

松村

「なに、バカなことってんの」

小島

「俺は いたって真面目だぜ。さあ 行こつぜ」

▽小島 松村の肩を抱きプールの機械室へ連れていく

○プールの機械室

▽松村 小島 機械室に入る

▽小島 松村の背後から抱きつき、松村の股間を競泳水着の上から揉み出す

「お願いだから、止めてくれない」

小島 「嫌だね。夏休み、全然できずにムラムラしてたんだよね。

今日は、二ヶ月分まとめて出してやるよ」

松村 「無理だった」

小島 「何いってんだ。ここは、待ってましたとばかり、固くなってきてるぞ」

松村 「違うって」

小島 「ほら、いつものように、横になれよ」

▽小島 松村を無理矢理、床のコンクリートの上に寝かせる

松村は、肘を後ろについで、上半身を少し起こした状態となる

小島

▽小島 松村の太ももの上に座る

「今日は、いいもの持ってきたんだ。ほら、これ、何か判る？」

▽小島 ポケットから小型のバイブレーターを取り出し、スイッチを入れる

”ブ~~~~ン”

小島

「これ、気持ちいいんだぜ」

▽小島は、松村の海パンの上からバイブレーターを当てる

▽松村 ビクっとする

「どっだ、気持ちいいだろう」

小島

▽松村 上を向く

「気持ちいいか」

小島

▽松村 腰が上下に動く

松村

「あ、ダメ」

小島

「早く、いけよ」

松村

「あ、だめ、やばい、あ、あ、あう」

▽松村 大きく腰を上げる

▽松村 海パンから、シミが滲み出してくる

小島

「早すぎるんだよ。罰としてもう一回な」

松村

「もうやめて」

小島

「嫌だね。黙ってるって」

▽小島 再び、バイブレーターを松村の競泳水着の一番固そうな先に充てる

松村

「ああああああ」

▽松村 競泳水着から、さらさらした、液体が流れ落ちる

小島

「今度は、時間がかかったな。しかも、薄いじゃないか」

小島

「さあ、三回戦いくぜ」

松村

「もう、無理だよ。出ないよ」

小島

「俺さ、夏休みに面白いビデオを見たんだよね。限界を超えると、潮を吹くらしいぞ。見せてくれよ」

松村

「無理だよ」

小島

「いいじゃないか、もう、こんなにグチヨグチヨなんだからさ」

松村

「やめて、やめて」

○機械室のドアが開く音

▽吉賀 機械室に入ってくる

▽小島 機械室に入ってくる吉賀の姿を見る

小島

「なんだお前か？」

▽吉賀 二人に近づく

吉賀 「二人で何をしているの？」

小島 「ちようどいいや。お前にも出してもらおうか」

吉賀 「出すって何を」

小島 「出すって言ったら、あれに決まってるだろうが」

▽吉賀 松村の姿を見る

松村の競泳水着の股間が粘液で汚れているを見る

▽吉賀 小島の方を向く

吉賀 「小島君、いい加減に止めてない」

小島 「はあ？ 何強気になってんの？ お前も、服を脱いで横になれよ」

吉賀 「ねえ、どうして、こんなことするの？」

小島

「いいから、横になれって」

▽小島 吉賀の腕を掴んだ。

▽吉賀 小島の腕をひねり、押さえつける

小島

「痛い、痛い」

▽吉賀 小島を払いのける

小島

「やったな、てめえ」

▽小島 吉賀に殴りかかる

▽吉賀 ひらりと交わし、小島の背中に、肘鉄を入れる

小島

「いてえ」

吉賀

「もう、僕たちに、こんなことしないでよね」

小島

「お前ら、いい気になるなよな」

▽小島は、機械室から出ていく

○プールの機械室

吉賀と松村の二人がいる

吉賀

「松村君、大丈夫？」

▽吉賀 松村に手を差しのべる

▽松村 吉賀の手をとる

▽吉賀 手を引き上げて、松村を起こす

吉賀

「大丈夫だった」

松村

「吉賀君、君って強いんだね」

吉賀

「何言ってるの。松村君ほどじゃないけどね」

松村

「え？ なんのこと？」

吉賀

「僕は、クラスで一番だれが強いのかは知ってるよ」

松村

吉賀

松村

吉賀

「なんだい、急に」

「隠してもだめ、僕には分かるよ」

「意味、わかんないや」

「ま、お互い 秘密ってことだね」

Copyright@2026 D<sup>3</sup>S

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

# 第二話

夢雄  
美侶

---

サブタイトル「体育祭がはじまるよ」

本話について

あらすじ

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D<sup>3</sup>S

---

□ 第一幕 体育祭準備委員会

○ある日の体育の授業 運動場にて

▽一年二組の生徒 整列している。前に土呂がいる

「もうすぐ体育祭だが、このクラスの代表を二名決めてくれないか？」

▽生徒 黙っている

土呂

「誰も 立候補しないのか？ そうだな、このクラスには女子が居るから、  
「名は女子にしよう」

(美優)

(ゲ！ やばっ)

土呂

「おい、女子、誰かやらないか？ そうだな。おい、夢前！ どうだ」

(美優)

(うわわわわ。名前を呼ぶな)

美優

「はい。別にいいですけど」

(美優)

(あ、はずみで答えてしまった)

土呂

「じゃ、一人は夢前に決まりだな。男子は誰がいいかな？」

○（その日の放課後）生徒会室

一年生から三年生 八クラス 四十八名が座っている

一組のデザイン科の三人の女子と、美優 女子は四人だけ

▽美優 小村 生徒会室で座っている

美優

「小村君、体育祭のクラス代表って何するのかしら？」

小村

「多分、ラインを引いたり、テントを張ったりするんじゃないのかな？」

（美優）

（私も小村君のテント張りたいわ）

▽美優 周りのメンバーを見渡す

（美優）

（それにしてもイケメンばかりだなあ。こりゃ土呂の趣味だな）

▽土呂 生徒会室に入って、教壇に立ち、話し始める

土呂

「さて、体育大会だが・・・」

土呂

▽一同  
会議

「では、学年毎の代を決めてもらおう」

▽一同  
会議

土呂

「では、一年生は、二組の小村と夢前で」

▽一同  
拍手

Copyright@2026 D<sup>3</sup>S

第二幕 土呂の家での出来事

○（数日後の放課後）生徒会室

各学年の代表だけとなり6人が座っている  
前に、土呂が座っている

▽美優 小村座っている

▽美優 壁にかかった時計をチラ見

（ああ、もう十八時じゃん。体育祭のクラス代表なんてやるんじゃないかった。

土呂

「よし、今日の打ち合わせはここまでにしよう。

みんなは明日、各クラスの代表に伝えておくように」

生徒一同

「はい」

土呂

「随分遅くなったな。時間のあるやつは、俺の家で飯を食っていけ」

三年生

「ありがとうございます」

美優

▽美優 電話をする

「もしもし、お母さん、今日、生徒会の集まりで先生の家でご飯を食べることになったの。少し遅くなるけど心配しないでね」

美優母

「あら、先生の家で食事。ご迷惑じゃないかしら」

美優

「大丈夫みたいよ」

美優母

「先生の家なら安心ね。行儀良くするのよ。遅くなるようだったら、電話して迎えに行くから」

美優

「うん。そうするわ。じゃ」

▽美優 電話を切る

○(夜) 土呂が住んでいるマンション

土呂の家は学校の正面に建っているマンションだ。

学校の校門を出て「分もしないうちに土呂の家の玄関についた。

生徒

「お邪魔します」

土呂

「おお、遠慮せずに入れ入れ」

▽生徒 土呂の家に入り リビングで床やソファアに座る

▽土呂 チラシを三年男子に渡す

土呂

「何するか決めろ」

三年男子 A

「ありがとうございます」

三年男子 A

「夢前さん、決めていいよ」

夢前

「私ですか」

三年男子 B

「レディファーストだからね」

美優

「私は、何でもいいですよ」

三年男子 A

「そんなこと言わず。俺たちも決められないよ」

美優

「わかりました」

美優

▽美優 チラシをうけとり、パラパラみる

「やっぱり、ピザがいいですね」

三年男子A

「ピザね。どれにする」

美優

「ピザの中身は、みなさんで決めてください」

三年男子A

「オツケー。じゃ、二年生で決めてもらう」

▽美優 メニューを二年生男子Aに渡す

▽二年生男子A 二年生男子Bがメニューを見る

三年男子A

「先生 決めたよ」

土呂

「よし」

▽土呂 ピザ屋に電話をする

▽土呂 電話を終えると、男子生徒に向かって話す

土呂

「おい、ピザが来るまでに、シャワーでも浴びて来いよ、部屋が汗臭くて、かなわん」

三年男子 A

「シャワーぐ浴びたいけどさ、着替えが無いし」

土呂

「そう言うと思ったぜ。その箱の中をみてみる」

三年男子 B

「なんですか」

▽三年男子 B ダンボールを開ける

ダンボールの中には、袋に入ったままの、ユニフォームが沢山はいつている

三年男子 B

「どうしたんですか？」

土呂

「スポーツショップがサンプルに持ってくるんだ」

三年男子 A

「でも、いいんですか」

土呂

「むしろ、着てみて 感想を教えてほしいからな」

三年男子 A

「なるほど。そういうことなら遠慮無く」

三年男子B

▽三年男子B ダンボールの中から選り出す  
「俺、これにしよう」

二年男子A

「おれ、一回バスケのユニフォーム来てみたかったんだよな」

二年男子B

「おれ、ラグビーしてみるか」

二年男子A

「ラグパンって、ノーパンで穿くんだけ」

二年男子B

「さすがに、それは出来ないな」

土呂

「夢前は、どうする？女子のユニフォームもあったはずだ」

美優

「いえ、私はいいです」

▽三年男子 シャワーを浴びに風呂場へ行く

三年男子A

「お前の でかいな」

三年男子B

「お前が、ちっちゃえんだよ」

三年男子 A

(美優)

「やかましい。俺のは膨張率がいいからいいんだよ」

(なに、膨張率って・・・いやだわ・・・)

風呂場から聞こえる声に、美優はドギドギ ワクワク

▽三年男子 リビングに戻ってくる

▽二年男子 風呂場でシャワーを浴びる

▽二年男子 リビングに戻ってくる

「小村 入ってこいよ」

小村

三年男子 A

「はい」

▽小村 シャワーを浴びに風呂場へ行く

(シャワーの湯が 流れる音がする)

(ああ、今、小村君の全裸でシャワーを浴びてるのね)

(美優)

(美優)

▽小村 リビングに戻ってくる  
バスケのユニフォームで

▽美優 リビングに居座る イケメン五人のユニフォーム姿を見る

(ここは イケメンパラダイスだわ)

○チャイムがなる

(数秒後)

▽土呂 ピザボックスを抱え、リビングに入ってくる

「来たぞ」

「やった」

「腹へった」

三年男子B

三年男子A

土呂

▽土呂 ピザボックスを男子生徒の座っている場所に置く

▽男子生徒 ピザを食べ始める

(数分後)

▽美優 リビング後方のテーブルの椅子に座り。ピザを食べている

▽男子生徒 ピザを食べ終わり くつろいでいる

「ああ、食った食った」

「ごちそうさまです」

「腹 一杯になったか」

「はい。ありがとうございます」

「夢前も大丈夫か」

「はい。ありがとうございます。ごちそうさまでした」

「そっか。それは、よかった。体育祭が終わったら、もう一回 やろうな」

「ラッキー」

三年男子 A

土呂

美優

土呂

三年男子 B

土呂

男子生徒ら

三年男子 A

土呂

「時間も遅いから、少し休憩したら帰れよ」

三年男子B

「はい」

▽二年男子A テレビラックのスモークガラスの向こうにあるものに気づく

スモークガラスの扉を開けて、中のDVDを取り出す

二年男子B

「先生、これ」

▽二年男子B 洋物のアダルトDVDのパッケージを土呂に見せる

土呂

「あちゃ、まずいもの見られたな」

(土呂)

(Bは、寝室に隠していて正解だったな)

(美優)

(まあ、あるあるよね)

▽三年男子A 二年男子Bからパッケージを受けとる

三年男子A

「こんなの見てるんですか」

土呂

「そりゃ、男だったら あるだろ」

三年男子B

「見ていいですか」

土呂

「さすがに、女子がいるんだから ダメだ」

三年男子A

「チエツ」

三年男子B

「ねえ、夢前さんも見てみたくない？」

美優

「いえ、私は結構です。でも、先輩方が見たいとおっしゃるなら、気にせずどうぞ」

三年男子A

「だってさ先生。見ていいでしょ」

土呂

「うーん。困ったな」

三年男子B

「ちょっとでいいからさ。最初の五分」

美優

「私、目を瞑ってますから どうぞ」

(美優)

(なんてね。私も洋物 見てみたいんだよね)

土呂

三年男子A

「そこまで言うなら、少しだけだぞ」

「やったー。見ようぜ」

▽三年男子B テレビの電源を入れ、DVDをセット

○アダルトビデオ上映会が始まる

▽男子生徒 テレビの前に釘付け

▽美優 後方のテーブル席で、見ている

「やべえ、俺 起ってきた」

「俺も」

▽三年男子B となりに座っている二年男子Aの股間を触る

「お前も、起ってるじゃん」

「そりゃ、起ちますよ」

二年男子A

三年男子B

三年男子B

三年男子A

(美優)

(小村君も起ってるの。教えて)

○二年男子A テレビのラック下に 別の物を見つけ取り出す

細い棒の先には、楕円形のゴム素材ボールのような物が付いてる

▽二年男子A 手持ち部分のスイッチを入れる

先のゴムボールが激しく振動する

(バイブじゃん。土呂、あんなの使ってるの)

(美優)

二年男子A

「先生 これは何」

土呂

「おい、そんな物まで出すなよ」

三年男子A

「それ、股間に当ててみな」

二年男子A

「ああ、そっいうやつか」

三年男子B

「ちょっと 試してみようぜ」

▽三年男子B 二年男子Aからバイブを取る

三年男子B

▽三年男子B 小村の前に移動

▽小村 嫌な予感

「小村 気持ちいいことしてやるから、足を広げて」

小村

「いや、いいです」

三年男子B

「ちょっと、みんなで抑えてくれ」

▽三年男子A 小村の後ろから 体と腕を押さえる

▽二年男子A 小村の右足を広げて押さえる

▽二年男子B 小村の左足を広げて押さえる

小村

「止めてください」

▽美優 三年男子Aの背中が邪魔で、小村の様子が見えない

(美優)

(もう、あいつ邪魔)

三年男子B

「ようし、今すっきりさせてやるからな」

▽三年生B 小村のバスパンの上からバイブを当てる

小村

「止めてください。本当に止めてください」

美優

「ちょっと、止めてあげてください。嫌がつてるじゃないですか」

(美優)

(一応、言っておかないとね)

三年男子B

「夢前さんも こっちきて 見てみる」

美優

「見たくありません」

(美優)

(クソ三年生 お前の 背中が邪魔なんだよ)

小村

「や、やばい。で、でぞつ」

(美優)

(ああ、小村君が男の人に犯されてる・・・ゾクゾクする・・・)

土呂

「おい、お前ら、いつまで いるんだ、早く帰れよ」

Copyright@2026 D's

(土呂)

▽土呂 テレビの場所に移動し、DVDを止める

三年男子A

(小村 めちゃくちゃ 勃起してるじゃないか)

ら、早く いけよ。俺たち帰れないだろ」

小村

「あ、や、やばい、 で、出る うう」

▽小村 バスパンの中で射精してしまう

三年生B

「よし、いった」

二年男子A

「わあ臭せえ」

▽土呂 小村の前に座り、バスパンを捲り 中を見る

(土呂)

(おお、結構デカイな)

(美優)

(私も見たいよ)

土呂

「小村、もう一回、シャワー浴びて、新しいのに履き替えてこい」

(美優)

▽小村 立ち上がり、風呂場へ向かう

バスパンの前は、シミが広がり、染み出た精液が光っていた

(最高、小村君の いく瞬間に立ち会えるなんて。

もうだめ、興奮が抑えきれないわ)

美優のエロ回路は焼き切れる寸前だった。

▽小村 シャワーを浴び、新しいバスパンを穿いて戻ってきた。

○(夜) 帰り道

▽小村 自転車を漕いでいる

▽美優 小村 美優は小村の腰を掴み荷台に座っている

「恥ずかしいところ見られちゃったな」

「小村君のせいじゃないわよ」

「しかし、先輩らは恥ずかしさってないんだな」

小村

美優

小村

美優

「男ばっかしの学校だもんね。しょうがないんじゃない」

小村

「俺も三年になったら、平気になるのかな？」

美優

「ええ、小村君はだめよ。あんなのになっちゃ」

小村

「そっだよな」

美優

「もし、そんなことになったら、こっするわよ」

美優

▽美優 小村の股間を握った

「あつ。ゴメンナサイ」

▽美優 すぐに股間から手を離す

(美優)

(しまった、やってしまった)

▽小村 腰を掴んでいる美優の手を持ち、自分の股間の上に持っていく

美優

「小村君 とうしたの」

小村

「なんとなく 夢前に握っていて欲しいんだ。いや？」

美優

「そんなことないわ」

小村

「じゃこのままで」

美優

「うん」

▽美優 小村のバスパンの上から 陰茎を優しく握る

美優

「ナメクジみたい」

小村

「ナメクジ？」

美優

「そう。ナメクジって触ったことないけど、きつとこんな感じだと思っわ」

小村

「夢前らしい たとえだな」

美優

「小村君と始めて一緒に帰った時もそうだったわ」

小村

「そういうこと、あったよな。あの時の俺、パンツ穿いてなくて、  
あ—————」

美優

「どうしたの」

小村

「パンツ穿くの忘れてた」

美優

「え、なんで」

小村

「しかも、土呂の家に忘れてきてしまった」

美優

「小村君ったら。案外、土呂 小村君のパンツを頭から被ってるかも」

←# インサート #← 土呂の家

○土呂の家のリビング

▽土呂 小村の忘れたパンツを顔にかけている

「いい臭いだあ」

→# インサート #→

○自転車に乗っている小村と、後ろに乗っている美優

小村

「まさか」

美優

「そうよね。さすがに生徒のパンツを被るなんてありえないわ」

←# インサート #← 土呂の家

○土呂の家

▽土呂 小村のパンツを頭に被ってる

→# インサート #→

(数分後)

美優

「だんだん大きくなってる。男の人のって面白いのね」

小村

「人間って不思議な生き物なんだなあ」

美優

「松子は、吉賀君のを触った時に、どう思ったのかしら」

小村

「吉賀のは、でかいから、縋ってとこじゃないかな」

(美優)

(吉賀はカリが鰻そのものなんだよ)

美優

「小村君の例えも面白いわ」

(美優)

(小村君 勃起してる)

美優

「なんだが、堅くなってる気がする。不思議」

小村

「なんでなんだろうな」

○美優の家の前

小村

「着いたよ」

(美優)

(え、もう。もっと触っていたかったのに)

▽美優 自転車を降りる

美優

「送ってくれてありがとう。じゃ、また明日、学校で」

小村

「うん、また明日」

▽美優 小村が見えなくなるまで 見送り 見えなくなったので家に入る

○夢前家

「ただいま」

「お帰りなさい。ごはんば 大丈夫」

▽美優 階段を上がる

「うん。先生の家で。ピザをご馳走になったよ」

「ちゃんと お礼 言ってきた」

「もちろんよ」

○美優の部屋

▽美優 部屋に入り、明かりを点け、ドアをしめる

▽美優 ベッドに寝転び 手を見る

美優

美優  
母

美優

美優  
母

美優

美優

「ついに、小村君のを 間接的にでも握ったわ」

Copyright@2026 DS

口 第三幕 体育大会

○（土曜日）姫磨工業高校の運動場  
体育祭の日が訪れた。

さすがに高校生にもなると、父兄の観客は殆どいない。

しかも、生徒の応援席にも、生徒のは殆どいない。

みんな、教室で駄弁っているのだ。

ただ、吹奏楽部は、運営のテントの中で、記録係を行わなくてはならない。

○学校の運動所 前方の本部テントの記録係の席

美優

「あああ、吹奏楽部のメリットで、ないじゃん」

部員 A

「そっくだよね。吹奏楽部って、めっちゃ損」

同じ吹奏楽部の、洋子と、愚痴を言い合っていた。

方、美優の教室では、男子生徒がだらだらと、たわいもない会話を楽しんでいた。退屈相違過ごしている美優の元へ、松子と智美がやってきた。

▽松子 智美 美優のいるテントにやってくる

松子

「美優」

美優

「あれ？ どうしたの？」

智美

「教室にいてもつままないもん。」「空いてる？」

▽智美 空いている椅子を指差す

美優

「空いてるよ」

松子

「どう、うちのクラス」

美優

「案外、いい線いってるんじゃないかな」

智美

「まあ、うちのクラスって、運動部多いもんね」

○放送が鳴る

”次は、部活動対抗リレーです。”

放送が流れて、部活の代表が、運動場の中心に集まった。部活動対抗ということなので、部活のユニフォームの参加だ。

ちなみに、吹奏楽部の美優は、クラリネットを持ったまま、走るのである。

▽美優 机に置いてあった ケースからクラリネットを取り出し組み立てはじめる  
「ちょっと行ってくるね」

▽美優 クラリネットを持って、運動場の中心部へ走っていく

○運動場 中央付近

出場する選手たちが集まっている

その中に 水泳部一年生代表の松村もいた

松村は、競泳水着にゴーグルをつけているだけの姿

(数分後)

○運動場

部活動対抗リレーが開始される

▽松村 走っている

▽松村 直線からカーブにさしかかったとき、曲がりきれず転倒する

▽松村　なんとか足を引きずりながら次の走者にバトンを渡

運営テントの中の救護設備にやってくる

救護設備では、生徒会のメンバーの保健委員が、一人できりもりしている

○美優達が居る本部テント

※美優はリレーに出場しているので、松子と智美だけいる

松村が転倒し救護テントに向かうのを見ている

智美

「大変、松村君　大丈夫かしら」

松子

「そうね、足をひきづってるから　心配ね」

智美

「私、ちょっと見てくる」

松子

「そうしてあげて」

▽智美　救護テントに向かう

○救護テント

▽松村　足を引きずりながらやってくる

松村

「すいません。転倒しました」

保健委員

「大変、椅子に座って」

松村

「はい。消毒だけしてもらえれば大丈夫です」

▽松村 椅子に座る

▽智美 松村の側にやってくる

智美

「松村君大丈夫？」

松村

「高谷さん どうして」

智美

「ちょっと、美優が部活対抗に出るって言ってたから見に来てたの。そしたら、松村君が点灯するの見て様子を見にきたのよ」

松村

「そうなんだ。夢前さん、クラリネット持って走るんだもんな。すごいよね」

智美

「そんなことより、松村君 早く手当してもらわないと」

▽保健委員 松村に消毒液を着けようとする

▽生徒 a 転倒して救護室にやってくる

生徒 A

「すみません。手当お願いします」

保健委員

「ちょっとそこで座ってて待っててくれる」

▽智美 保健委員に話かける

智美

「あのお、私 手伝いましょうか」

保健委員

「え」

智美

「クラスメートなんです」

保健委員

「助かるわ。お願いできるかしら。救急セットは、そこにあるから、必要なものは勝手に取ってくれる」

智美

「はい」

▽保健委員 智美に消毒綿を挟んだ、ピンセットを渡す

智美

▽智美 ピンセットを受けとる

▽保健委員 もう一人のけが人の手当にあたる

「ちょっと、我慢してね」

▽智美 松村の膝に消毒液のついた綿をポンポンとあてる

「痛」

「これぐらい 我慢しなくちゃ」

「ごめん。結構、しみるんだ」

▽智美 膝の消毒が終わり、膝に絆創膏を貼る

「これで いいわ」

「ありがとう」

「ちょっと まだよ」

松村

智美

松村

智美

松村

智美

松村

「どうかした」

智美

「こども 血が出てるわ」

松村

▽智美 松村の胸を指差す

転けたときに擦り傷ができたようだ

「本当だ。足しか見てなかったよ」

智美

「こども手当するわね」

▽智美 消毒液の付いた脱脂綿を、松村の胸に当てていく

(智美)

(何度見ても、松村君の胸って素敵)

松村

「やっぱり、しみるね」

智美

「しょうがないわよ。今日は、部活でプールに入らない方がいいんじゃない」

松村

「そうだね。プールに ばい菌が入ってもいやだから、プールには入らないようするよ」

---

Copyright@2026 D<sup>3</sup>S

---

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

# 第三話

夢雄  
美侶

---

サブタイトル「文化祭の準備をはじめよ」

本話について

あらすじ

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D<sup>3</sup>S

---

□

第一幕 美魔女達の巣窟

○（夕方）一年二組の教室

ホームルームの時間

さて、体育祭が終わると、続けざまに文化祭だ。ホームルームの時間、文化祭の出し物についての意見を出し合った。

「ねえ美優、文化祭の出し物って、何がいい？」

「なんでもいいんじゃない？」

「私は、メイド喫茶なんてどうかな？」

「メイド喫茶？」

「私たちって結構イケテルと思うんだけどな」

「その女子、意見があるなら手を上げて」

「私は、メイド喫茶がいいと思います」

智美

美優

智美

松子

智美

中野

智美

生徒A

「メイド喫茶」

生徒B

「メイドって、誰がするんだよ」

智美

「私達にきまつてるじゃない」

小島

「夢前ならメイドを見て冥土に行くっていいみか」

夢前

「ほんまに冥土に行くか」

小島

「こわー」

生徒C

「まあ、茶店が妥当だよな」

生徒D

「そうだよな」

生徒E

「めちやくちや人を集めて、がっぽり儲けようぜ」

竹田

「こらこら、売上は、全部寄付をする決まりなんだぞ」

生徒G

「なんだ。やる気なくすな」

竹田

「どのクラスが、いくら寄付できたかを競うのもいいじゃないか」

生徒H

「だよな。それには、何か特長を出さないと」

智美

「だから、メイド喫茶なのよ」

小村

「そうだ、実験室の器具を使った茶店にしない？」

生徒I

「なに それ」

小村

「たとえば、照明は、アルコールランプ。コップは、ビーカー、  
コーヒーマルクのミルクは試験管で出すんだよ」

中野

「それいいな」

生徒J

「汚くないか？」

小村

「大丈夫だよ。ビーカーの洗浄にかけては、俺らプロじゃないか」

生徒K

「いいかもしれないな」

中野

「それから、せっかく女子もアイデアを出してくれているんだから、女子には

メイドをやってもらおうよ」

「いいわよ。でも他校からも沢山人がくるのよ。お客は 男とはかぎらないわ。女子だって楽しめるようにするべきじゃない」

「と、言っと」

「半分はメイド喫茶で、もう半分はイケメン喫茶ってどう」

「イケメン喫茶だとよ」

「私が言うのもなんだけど、うちのクラスって、他のクラスに比べて、結構イケメンぞろいだと思うのよね」

「三カ所に分けて、小島でホラー喫茶にするのもいいんじゃない」

「夢前 それ最高」

「お前ら、好き勝手言うなよ」

(議論中)

智美

中野

智美

生徒B

智美

美優

生徒C

小島

中野

「じゃ、うちのクラスは茶店で申請するね。それと、代表を二名決めなくちゃいけないんだけど」

竹田

「いつもは、デザイン科が仕切ってくれてるんだが、それではいけないと今年は、一年生から、うちの科が指名されたんだよ」

生徒D

「めんどくせえ」

竹田

「そういうな。いつも デザイン科がやってくれてるんだから」

生徒E

「でも、デザイン科ってことは、おねえ様にかこまれるんじゃないかね？」

生徒F

「おお、それじゃ、俺、なってもいいぞ」



EROMODE



#吉賀&小村

中野

「静に。まじめに考えてくれよ」

生徒G

「マジで考えてるぞ」

生徒E

「じゃ、イケメン喫茶ってことは、ここは、クラス一のイケメン吉賀でいいんじゃないか」

生徒F

中野

吉賀

中野

吉賀

中野

吉賀

小村

吉賀

中野

小村

「そっだな 吉賀だ、吉賀だ」

「吉賀、どうだ」

「僕でよければいいですよ」

「じゃ、もう一人を誰にするかだな」

「僕が、使命してもいいですか」

「希望があるなら、言ってみて」

「小村君」

「え、俺」

「うん」

「小村 どう」

「吉賀に頼まれたら、しょうがないか。やってみよう」

中野

(ナレーション)

「じゃ、一年生代表は、小村と、吉賀で。さっそくだけど、明日の放課後にあるから よろしく」、

(工業高校には、美優が通う工業化学科以外に、機械科、電気科、情報処理化、溶接科、そして、デザイン科がある。その中でも、デザイン科は、女子生徒が圧倒的に多く、ほんの一握りの男子を支配していた。

デザイン科は、女子への配慮からか 他の科と違う離れた場所に校舎にあり、校門も、他の科は東門から入るのに、デザイン科だけは、西門を使う。全校生で行うイベントの時以外は、ほとんど顔を合わすことがない。まさに、現代の大奥である。

そして、毎年行われる文化祭を取りしきるのは、デザイン科の女教師、工業高校の女帝 大倉である

←# インサート #← 大倉が廊下を歩くシーン

▽大倉 廊下をさっそうと歩いている

→# インサート #→

Copyright © 2020 DS

○（次の日の放課後）学校の廊下

▽吉賀と小村は、デザイン科に向かって歩いていく

「デザイン科に行くの初めてだよな」

「僕も」

「女の子ばかりだよ。ドキドキするよ」

「そうなの。小村君は、女の子が好きなんだ」

「吉賀は、そんなこと思わないのか」

「僕は、こうして小村君と一緒にいるときの方が、ドキドキするよ」

「そうなんだ」

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

○デザイン科校舎の二階の突き当たり 第一美術室

美術室の奥には、壁（一部曇りガラス）で仕切られた準備室がある

（美術室の見取り図）



Copyright@ZUZU D'S

大倉

▽小村 吉賀 扉を開けて中に入る  
大きな作業テーブルを囲んで、一年生、二年生、三年生（全員女子）が座っている

「いらっしやい、まっけたわよ」

女帝 大倉は、三十八歳独身 化粧濃すぎ。

大倉

「あなたたちの席は、そこね」

▽小村 吉賀 椅子に座る

大倉

「じゃ、自己紹介をしてくれる。三年生からね」

三年生 A（田中）

「三年デザイン科の田中です」

三年生 B（中島）

「おなじく三年デザイン科の中島です」

二年生 A（森下）

「二年デザイン科の森下です」

二年生 B（近野）

「おなじく、二年生デザイン科の近野です」

一年生 A（谷口）

「デザイン科一年生の谷口です」

一年生B（小山）

「デザイン科一年生小山です」

小村

「工業化学科一年生小村です」

吉賀

「同じく吉賀です」

大倉

「今年は、特別に一年生は四人にしてみました。いつもは、女子生徒六人で構成しているんだけど、男子を入れて、マンネリな文化祭を変えてみたかったのよ」

三年生A（田中）

「さすが、大倉先生」

▽他の生徒 うなずく

（大倉が、代表らに説明している）

「さあ、今日はこれくらいにしましょうか」

「はい」

大倉  
代表生徒ら

大倉

「次は来週の放課後なんだけど、小村君と、吉賀君には、頼みたいことがあるの」

小村

「はい、なんでしようか」

大倉

「ちょっと、奥の準備室から文化祭で使う小道具を取り出したりしてほしいの」

小村

「はい、大丈夫ですよ」

大倉

「ごめんなさいね。ちょっと重くて、いつも女子だけだと大変だったのよ」

(小村)

(なるほど、だから男子も代表に入れたんだ)

小村

「任せてください。な、吉賀」

吉賀

「そうだね」

大倉

「一年間も倉庫に片付けてたから、ホコリまみれなの。」

次は、汚れてもいい服装で来てくれる。体操服でいいわ」

小村

「わかりました」

(吉賀)

(小道具を取り出すなら、半袖よりも長袖、長ズボンの方がいいのに変だな)

大倉

「ありがとう。よろしくね」

○（一週間後）第一美術室

▽吉賀 小村 美術室に入る

小村 「すみません。おそくなりました」

三年生 A（田中） 「ちょっと、遅いわよ」

大倉 「ちょっと、あなた達は、校舎が一緒だからいいけど、彼らは 遠いのよ。

少しくらい 許してあげてよ」

三年生 A（田中） 「はーい」

▽吉賀 小村 席に座る

大倉 「じゃ、早速 打ち合わせを開始しましょう

田中さん すすめて」

三年生 A（田中） 「じゃ、今日は、最初だから、文化祭までのスケジュールを打ち合わせするわね  
その後、倉庫から必要な物を出してきて、壊れていないかを確認よ」

三年生 A (田中)

壊れている物があつたら、修理をするか、作り直すかを決めないといけないわね  
修理は、一年生の仕事ね」

一年生 A (谷口)

「はい」

一年生 B (小山)

「はい」

小村

「はい」

大倉

「修理は、デザイン科が担当するから、小村君達 男子は 倉庫から飾り物を  
探して取ってきてもらえるかしら」

小村

「わかりました」

大倉

「そうそう、この前言ったけど、倉庫はホコリまみれで汚いから、汚れてもいい  
服装になつてね」

小村

「すみません。すっかり忘れていました」

大倉

「あら、そうなの。でも大丈夫、こつちで用意しておいたわ」

▽大倉 机の下から、紫色のランパン (陸上部のユニフォーム) を取り出す

大倉

「これに着替えてくれる」

小村

「それですか」

大倉

「そうよ。去年、陸上部を退部した子が置いていったんだけど、まだ綺麗よ」

小村

「はい」

大倉

「制服が汚れちゃいけないでしょ。早く、これに着替えて」

▽大倉 紫のランパン二枚を、小村と吉賀の前に差し出す

▽小村 ランパンを受取り、一枚を吉賀に渡す

▽吉賀 ランパンを受取、広げてみる

インナーが切り取られていて、裾がスカスカしている

「これ、インナーがないんですけど」

「あら、本当だわ。もう、いけない先輩ね。でも、気にしないで、見てないから」

大倉

吉賀

小村

「上は、どうするんですか」

大倉

「暑くなるから いいでしょ」

三年生（田中）

「そんなの裸に決まってるじゃない」

三年生（中島）

「そうよ。男子なんだから、恥ずかしくないでしょ」

小村

「わかりました」

大倉

「わかったのなら、さっさと着替えて。時間ないんだから」

▽小村 吉賀の方を見る

小村

「あっちで、着替えようぜ」

吉賀

「うん」

▽小村 吉賀 美術室の端の方に行き、着替える

戻って来たときは、二人とも紫のランニングパンツのみを身につけた状態

小村

「終わりました」

▽大倉 小村 吉賀のランニングパンツ一枚だけの姿を見る

インナーが切り取られたランニングパンツは、陰茎をホルルドすることなく  
下向きに垂れ下がっているのが判る

大倉

「二人ともスタイルいいわね」

小村

「ありがとうございます」

三年生B（中島）

「ええ、とつてもいいわよ。二人とも、三年生の間では評判いいのよ」

小村

「え、本当ですか」

二年生A（森下）

「二年生の女子にも人気よ」

小村

「そうなんですネ。ちょっと、うれしいです」

吉賀

「小村君、デレデレしすぎ」

三年生A（田中）

「あら、吉賀君だって、そうよ。カワイイ顔してるのに、もっこりが大きいって」

大倉

「いら、どこ見てるの」

三年生 A (田中)

「はい」

大倉

「じゃ、谷口さんと、小山さん、倉庫に案内してあげて」

一年生 A (谷口)

「はい」

▽一年生 A (谷口) 小村、吉賀の方を向く

一年生 A (谷口)

「じゃ、ついてきて」

小村

「はい」

▽小村 吉賀 一年生 A (谷口) 一年生 A (小山) について、美術室から出る

(数分後)

▽小村 吉賀 何度も準備室から美術室へ小物を運びに往復する

小村

「これで最後だ」

吉賀

「そしてみたいだね」

▽小村 吉賀 美術室に戻ってくる

▽小村 吉賀 椅子に座る

目の前にオレンジジュースが置いてある

小村

「いやー汗かいちゃった」

大倉

「ごくろうさま。大変だったでしょう」

小村

「いえ、全然平気です」

大倉

「ジュースを入れたら、飲んで休憩してて」

小村

「はい、ありがとうございます」

▽小村 吉賀 ジュースを飲む

大倉

「谷口さん、修理の方はどう」

一年生A（谷口）

「はい、どこも壊れてません」

大倉

「よかった。じゃ、そのまま使えそうね」

三年生A（田中）

「スケジュールの方もオッケーです」

大倉

「ありがとう。順調にすすんでいるようね。こっちも順調のようだし」

▽小村 体を揺らして、今にも眠りそうな顔をしている

吉賀

「小村君 どうしたの」

小村

「ちょっと 疲れたのかな」

大倉

「あら、大丈夫？ちょっと重たい物を運びすぎて疲れたのかしら  
吉賀君の方は、大丈夫」

吉賀

「はい、だい、じょう」

▽小村 机に頭を着けて寝てしまう

▽吉賀 同じく、机に頭を着けてねてしまう

大倉

「全て、順調ね。さあ、みんな 手伝って。吉賀君は、そっちの机に寝かせましょう」

(数分後)

▽大倉 机の上で寝ている 小村を揺さぶる

「そろそろ 起きて」

大倉

▽小村 目を覚ます

机の上で、大の字に寝かされて、両手、両足が 机の脚に縛られている

▽三年生 A (田中) 寝ている吉賀の顔に、自分の顔を近づける

三年生 A

「吉賀君 そろそろ起きようか」

▽吉賀 目を覚ます

小村と少し離れた机の上で、大の字に寝かされて、両手、両足が机の脚に縛られている

▽小村 手足の自由が利かないので、顔を左右上下に向け、手足の状態を確認

小村

「え、何なんですか」

大倉

「うちの文化祭の恒例の儀式なの。あなたも楽しむといいわ」

小村

「どういうことですか」

大倉

「毎年、一年生男子を使って、芸術を楽しむのよ。でも、今年のデザイン科の男子はは不作なのよね。で、工業化学科にあなた達が居たわけ」

小村

「意味がわからないんですけど」

大倉

「芸術を楽しむのは私達。あなたたちは、道具にすぎないわ」

小村

「何をするんですか。ほどいてください」

大倉

「だめよ」

▽▽三年生B（中島） ランニングパンツの上から吉賀の股間を揉んでいる

三年生B（中島）

「小村君、おしゃべりはダメよ。ほら、吉賀君は、温和しくしてくれてるんだから」

三年生A（田中）

「ちょっと、中島 フライイングよ」

小村

三年生B (中島)

三年生B (中島)

▽三年生A (田中) ランニングパンツの上から小村の股間を揉み出す

「や、やめてください」

「どう、吉賀君 気持ちいい」

「もうこんなになって」

▽吉賀 インナーの付いていないランニングパンツでは、固くなった陰茎が  
垂直に天井を向いてそそり立っている

▽三年生B (中島) ランニングパンツの上から、陰茎を握り、扱いている

吉賀

三年生B (中島)

二年生B (近野)

三年生B (中島)

「あ、あっ」

「もっと 声を出していいのよ」

「先輩、ずるいです。私も 吉賀君の揉んでみたい」

「じゃ、どうぞ」

二年生 B (近野)

▽二年生 B (近野) ランニングパンツの上から股間を揉みはじめる

「なんて、固くて太いの」

▽二年生 B (近野) 吉賀のランニングパンツの上から固くなった陰茎をギュッと握る

吉賀

「あ、だ、だめ」

▽三年生 A (田中) ランニングパンツの上から小村の陰茎を扱きだす

三年生 A (田中)

「こっちも、大きくなってるわよ」

小村

「やめてください」

三年生 A (田中)

「えーこんなに大きくなってるのに。出して小さくした方が方がいいいわよ」

小村

「まじで、止めてください」

▽三年生 A (田中) 小村の陰茎を激しく扱く

▽小村 扱かれる手のリズムに合わせて腰をふる

小村

三年生 A (田中)

「口で言っても、こゝは正直ね」

二年生 A (森下)

「そろそろ、私にもやらせてください」

三年生 A (田中)

「もうちょっと、ちょっとまってね」

▽小村 紫のランニングパンツに、少しシミが出来た。

小村の我慢汁を出してしまったようだ

三年生 A (田中)

「小村君も気持ちよさそうね。じゃ、変わりましょう」

二年生 A (森下)

「ありがとうございます」

▽二年生 A (森下) ランニングパンツの上から小村の陰茎を掴む

二年生 A (森下)

「太いわ」

三年生 A (田中)

「でしょ」

小村

二年生 A (森下)

▽二年生 A (森下) 小村の陰茎を扱きだす

「あ、あう、や、やめて、出ちゃいます」

「え、もう 出るの はやーい」

▽二年生 A (森下) 扱き続ける

小村

「あ、やばい、まじで、あ うっ」

▽小村 ランニングパンツを穿いたまま、射精

ランニングパンツの表面から、粘液が滲み出てくる

二年生 A (森下)

「もう、いっちゃたの」

▽三年生 A (田中) 手で、小村のランニングパンツのウエストバンドを掴み  
持ち上げる

三年生 A (田中)

「ほら、こんなに出してるわよ」

▽一年生 A (谷口) のぞき込む

一年生 A (谷口)

「先輩、すごいです。初めてみました」

三年生 A (田中)

「男子って 面白いでしょ」

一年生 A (谷口)

「はい」

○吉賀の周り

▽三年生 B (中島)      ランニングパンツの上から吉賀の陰茎を扱っている

▽吉賀      目を瞑り、黙って扱かれているのを耐えている

三年生 B (中島)

「あっちは、終わったようね。こっちもペースを上げるとするわ」

二年生 B (近野)

「そろそろ、私もいいですか」

三年生 B (中島)

「あら、ごめんなさい。代わるわね」

二年生 B (近野)

「吉賀君、私が気持ち良くいかせてあげるわね」

▽二年生 B (近野)      吉賀のランニングパンツの裾から手を入れ、直に陰茎を握る

三年生B (中島)

「あら、大胆ね」

二年生B (近野)

「ふふふ。早くいってもらいたいもの。なんて太くて熱いのかしら」

▽二年生B (近野) 吉賀の陰茎を扱きだす

吉賀のランニングパンツの中が大きく揺れている

吉賀

「あつ。いく、いく」

▽二年生B (近野) 吉賀のランニングパンツから素早く手を取りだし、

ランニングパンツの上から陰茎を握りしめる

▽吉賀 握られたランニングパンツの先から、粘液が ドロツと出て、

二年生B (近野) の手の上を流れる

▽二年生B (近野) ゆっくりと陰茎を搾り出すように上下に動かす

上に動かす度に、吉賀のランニングパンツの先から粘液が流れ出る

三年生B (中島)

「こっちも、完了よ」

▽大倉 ランニングパンツの上から小村の陰茎を握りゆっくりと扱く

グチュグチュと音を立てる

大倉

「ああ、いい音だわ。こっちは どうかしら」

▽大倉 吉賀の方に行き、吉賀のランニングパンツの裾から手を入れて  
陰茎を握りゆっくりと扱く

大倉

「このネバネバ感も素敵ね」

▽大倉 吉賀のランニングパンツから手を取り出し、自分の指についた、  
吉賀の精液を臭う

大倉

「臭いも素敵」

▽大倉 小村の方に行く

▽大倉 小村の胸に、手に着いた吉賀の精液を塗り出す

大倉

「ほら、吉賀君が出したものよ。素敵でしょ」

小村

「もう、やめてください」

大倉

「そうね。今日は、これくらいにしましょう」

♡ → E R O M O D E → ♡

○（打ち合わせが終わって）デザイン科棟から、工業化学科棟に続く廊下  
小村と、吉賀が制服を着て歩いている

「吉賀、大丈夫か」

「うん。なんとか」

「大丈夫」

「大丈夫って言われても」

小村

吉賀

小村

吉賀

Copyright@2026 D's

□第二幕 2回目打ち合わせ

○（翌週の放課後）デザイン科棟へ向かう廊下

▽吉賀 小村が、歩いて美術室へ向かっている

「大丈夫かな」

「何が」

「ほら、また、射精させられそうだな」

「さすがに、もう 無いんじゃないかな」

「そうだといいけど」

「そうになったら、そうなったで しょうがないよ」

「吉賀は、強いよな」

○美術室

小村 吉賀 小村 吉賀 小村 吉賀 小村

▽吉賀 小村 席に座っている

▽大倉 美術室に入ってくる

メンバーが揃っているのを見る

大倉 「じゃ、始めましょうか」

三年生 A (田中) 「では、今日は体育館で行われる出し物のスケジュールの確認からしましょう」

一同 「はい」

会議は、滞りなく進んでいく

(一時間経過)

三年生 A (田中) 「じゃ、今日の会議は、これで終わり。先生、何かありますか」

大倉 「そうですね。文化祭とは関係ないんだけど、デザイン科で使う新しい装置が入ったのちよっと試してもらえるかしら。時間がないのだったらいいのよ」

三年生 B (中島) 「私、大丈夫です」

二年生 A (森下)

「私も 大丈夫です」

二年生 B (近野)

「私も」

一年生 A (谷口)

「私も」

大倉

「ごめんなさい。この装置は、二年生からしか使わないから、  
一年生は帰ってちょうだい」

一年生 B (谷口)

「わかりました」

▽一年生 A (谷口) 一年生 B (小山) 美術室から出て行くとする

▽小村 吉賀 立ち上がり

小村

「それでは、僕らも」

大倉

「あなたたちは、居てほしいの。デザイン科がどんなことしてるか  
知ってほしいのよ。無理には引き留めないけどね」

小村

「わかりました。僕も、少し 興味あつたんです」

大倉

「そう、興味あるの。先生もだわ」

▽一年生A（谷口） 一年生B（小山） 美術室から出て行ってしまった

▽大倉 教卓の後ろに行き、装置を取ってくる

小さな台座の上に、丸いテーブルが載っている  
その横に、モーターなどの機械がついていた

三年生B（中島）

「先生 これは」

大倉

「最新型の ろくろ よ」

三年生B（中島）

「ろくろなんですか」

大倉

「ええ、そうよ。手元のスイッチで、早さを自在に変えられるの」

三年生A（田中）

「でも、それだけでは、今までも大してかわらないような気がするのですが」

大倉

「ここを見て」

▽大倉 さらに、箱からパーツを取り出す円柱の部品だ

大倉

「ここに乘せて、こうやって固定するのよ」

三年生 A (田中)

「先生、これって まさか」

大倉

「さすが、田中さん。気が付くのが早いわ。じゃ、早速試してみましよう」

▽大倉 小村に近づいてくる

大倉

「さっき、興味あるって言ったわよね」

小村

「はい」

大倉

「じゃ、服を抜いて、机の上に寝てくれる」

小村

「え、なんで」

大倉

「あら、じゃ、またオレンジジュースを飲んでもらおうかしら」

小村

「どうして、そんなことするんですか」

大倉

「私たち 暇なのよ」

小村

「それだけで」

大倉

「そうよ。あなたたち 男は、私たちを 喜ばすために生まれてきたの。もっとも、あなたたち、二人が イケメンだからってのもあるわ イケメンに生まれたからには、諦めなさい」

三年生B (中島)

「そうよ。不細工だったら、こんなことしてもらえないわよ。ありがたく、私たちの洗礼をうけなさい」

吉賀

「小村君、もう、この人達に 何を言っても無駄だよ。僕は、もういいよ。この人たちの言うこときくよ」

大倉

「さすが、吉賀君。特別に、あなたからしてあげるわ」

▽吉賀 学生服を脱ぎ出す

「私たち、取りあえずレディだから、レディの前でさらけ出すのは止めてくれる 田中、いつものパンツを持ってきて」

▽三年生A (田中) 引き出しを開け、インナーが切り取られたランパンを 取り出し、二人に渡す

三年生 A (田中)

「これに履き替えてくれる」

▽小村 吉賀 美術室の端にいき、制服を脱ぎ、シャツも脱ぎ、インナーが切り取られて紫のランパンだけの姿になる

▽小村 吉賀 大倉と女子の前に戻ってくる

小村 「これでいいですか」

三年生 A (田中) 「うん。素敵だわ」

大倉 「じゃ、今から、陶芸大会よ。まずは、吉賀君からね」

三年生 A (田中) 「じゃ、机の上に寝てくれるかしら」

▽吉賀 だまって机の上上がるうとする

小村 「吉賀、待って」

吉賀 「どうしたの」

小村

「吉賀、俺がする」

大倉

「あら、どうしたかしら」

小村

「俺に してもらえますか」

大倉

「どっちが先でもいいわよ」

小村

「吉賀の分も、俺でやってください」

吉賀

「何言ってるの」

大倉

「素敵な友情ね。いいわよ。あなたの友情に免じて、今日は あなただけにするわ」

小村

「よかったな。吉賀」

吉賀

「小村君」

大倉

「でも、いいこと。途中で逃げたり、邪魔をしたらだめよ。その時は、吉賀君にも 実験に協力してもらおうわ」

小村

「わかりました。いいよな、吉賀」

吉賀

「僕は、構わないけど。小村君、大丈夫」

小村

「大丈夫だよ。命を取られる訳じゃないんだから。ちょっと気持ち良くなるだけだよ」

▽小村 机の上に寝転ぶ

大倉

「装置を付けるには、堅さが足りないわね」

▽大倉 小村のランパンの裾から手を入れ、陰茎を握ると 扱きだした

さっきの約束があるので、小村は抵抗しない

小村

「あっ、あっ」

大倉

「さすが、若いわね。反応も早いわ」

吉賀

「あ、あっ、や、やばい」

大倉

「ちょっと まだよ。しょうがないわね。

ちょっと、たこ糸持ってきて」

▽三年生A（田中） 引き出しを開けて、たこ糸とハサミを取り出し

大谷の側に置く

大倉

「あら、ハサミも、気が利くわね」

▽大倉 ランパンの裾から手を出し、ランパンの上から小村の陰茎を扱っている

大倉

「これで、十分ね」

▽大倉 小村の陰茎の根元部分を、ランパンの上からたこ糸で縛った

大倉

「これでいいわ」

▽大倉 装置を小村の股間の上に置き、穴から小村のランパンで包まれた  
そり立った陰茎を通す。

▽大倉 円柱系の器具を、陰茎に被せた

の先から、小村の穿いている紫のランパンの先が見えている

三年生 A (田中)

「包茎だけど、キノコが大きいのね」

大倉

「じゃ、いくわよ」

▽大倉 スイッチを入れる

円柱が回転し始める

「あ、あ、や、や、やばい」

「うっ」

▽小村 体が大きく仰け反る

小村の穿いている紫のランパンの先が、僅かにシミができた

▽小村 大きく深呼吸をしている

「今度は、こっちのアタッチメントを試しましょう」

▽大倉 円柱形の器具を、小村の陰茎から取り出す

小村の陰茎は根元をたこ糸で結ばれているので、ランパンの中にソーセージが入ったかのようになっている

「今度のは、さらに感じるわよ」

▽大倉 次の器具を、小村のランパンの上から装着した

柔らかい素材でできた、円柱形の器具だ

小村

小村

大倉

大倉

透明な素材で、中が良く見える

▽大倉 スイッチを入れる

小村

「あああ、あああ」

▽大倉 器具の上に両手を添える

大倉

「ちから加減は、どう。これだと、私も あなたの物を感じられるのよ」

大倉

「ああ、興奮しているのは、手の平に伝わるわ」

小村

「あ、で、でる」

▽小村 両足をピンと延ばす

大倉

「もう、いっちゃったのかしら」

三年生 A (田中)

「早すぎるよ」

三年生 B (中島)

「ちょっと、罰として、もう一回よ」

大倉

「そうね。最後は、全員参加よ」

▽大倉 器具を外すと、ランパン越しに小村の陰茎を握り、扱きだす

小村

「あ、あう、もう、もう、出ないですよ」

大倉

「二年生、交互に扱いて」

▽大倉 手を離し、代わりに二年生に扱くように指示をする

二年生A (森下)

「はい」

▽二年生A (森下) 小村の陰茎をランパン越しに扱きだす

▽三年生A (田中) 小村の左乳首の周りを舐めながら、もう片方の手で

右乳首を刺激する

▽三年生B (中島) 小村のヘソの周りを舌尖で舐め始め、ランパンの裾から

睾丸を優しく揉む

小村

「あ、あ、もう、もうだめ。で、でる」

小村

「うーーーーっ」

大倉

▽小村 体が大きく仰け反る

「満足したかしら」

小村

「い、痛いです。紐をほどいてください」

大倉

「お願いって言わなきゃ」

小村

「お願いします。紐をほどいてください」

大倉

「そうそう。私、素直な子が好きなの」

▽大倉 小村の陰茎の根元を縛っている たこ糸の端を引っ張るとスルスルとほどけた。と同時に、紫のランパンから みるみる粘液が染み出し、股間の周りは、ビチヨビチヨな状態になり、裾からも ふともも伝いに精液が流れてきた

小村

「もう、いいですか」

大倉

「まだ、最後に一つあるのよ」

小村

▽大倉 小村のランパンの裾から手を入れ、陰茎を直に握り、激しく扱きだす  
「い、いたい。や、止めて」

▽大倉 激しく扱いている

小村のランパンが激しく動いている

小村

「あ、マジで、マジで、漏れちゃう」

小村

「あ」

▽小村 潮（小便を漏らす）を吹いてしまい、紫のランパンが、みるみる濡れて、

裾からも小便が垂れ、机を伝い床に流れる

三年生 A（田中）

「わ、潮拭いたわ」

三年生 B（中島）

「すごい、こんなの初めてみた」

大倉

「ふふふ。気持ちよかったですよ」

▽小村 無言

大倉

「さあ、片付けて帰りましょう。あなた達は、自分の出した物を、ちゃんと拭いておいてね」

▽二年生A（森下） 二年生B（近野） 片付け始める

▽大倉 美術室を出ようとする際、中に向かって

「次は、最後の会議だから、お二人さん、楽しみにしておいてね」

▽大倉 美術室から出ていった。

大倉

□ 第三幕 打ち合わせ最終日

○ 美術室入口

▽ 吉賀 小村 美術準備室の扉をあける

「いらっしやい」

「待ってたわよ」

「さあ、入って入って」

▽ 吉賀 小村 が中に入ると、みんなとは離れた場所の机に座っていた  
知らない男子生徒が

▽ 小村 知らない男子生徒が気になって、チラチラ見してしまう

「小村君、今は気にしなくていいから」

(しばらく 打ち合わせを行っている)

▽ 小村 小声で、隣の吉賀に

大倉

三年生 A (田中)

大倉

大倉

大倉

「さあ、今日の打ち合わせは、これくらいにしましょう」

小村

「今日は、何もなさそうだ」

吉賀

「この前の帰りに、何かしそうな前触れがあったんだけどね」

▽大倉 小村と吉賀のコソコソ話が聞こえる

大倉

「小村君、吉賀君、どうかした」

小村

「いえ、別に」

大倉

「私たちからは、何もないわよ」

▽小村 安堵した顔

▽大倉 離れた席にいる、男子生徒に声をかける

大倉

「川崎君、ちょっとこっちへ来て」

▽川崎 立ち上がり、みんなの居る場所にやってくる

大倉

身長は、一八〇センチ イケメンで小村よりも背が高いスリムな高校生

「もっと 近くへ」

▽川崎 大倉のそばにやってくる

大倉

「三年生の川崎君。かっこいいでしょ。二人に挨拶をして」

川崎

「デザイン科、三年生の、川崎です」

小村

「工業化学科 一年生の小村です」

吉賀

「おなじく、吉賀です」

大倉

「私たちは、用がないんだけど、この川崎君がどうしても、二人に頼みたいことがあるらしいわ」

▽川崎 うつむいている

「ねえ、川崎君、二人に、お願いがあるのよね」

大倉

▽川崎 黙っている

三年生A（田中）

「早く、言いなさいよ」

吉賀

「川崎さん、願って何ですか」

川崎

「セ、セック、、、ス」

三年生B（中島）

「聞こえないわね」

川崎

「ぼ、僕とセックスしてください」

三年生A（田中）

「いやー、男同士で、セックスですって」

三年生B（中島）

「変態よ。変態」

吉賀

「川崎さん、どうして」

川崎

「理由は・・・」

大倉

「あら、川崎君 約束が違うわよ」

▽川崎 大倉の顔を見て、すぐに吉賀の顔を見る

川崎

「なんでも、ない。君と したいだけなんだ」

大倉

「あら、大変なことになったわね。どうする お二人さん」

小村

「セックスって、俺、そんなのする気ないから」

吉賀

「悪いけど、僕も」

▽川崎 土下座をする

川崎

「お願いだ。頼むから セックスをしてくれ。でないと、でないと」

吉賀

「何か、理由があるんだね」

▽川崎 土下座の姿勢で、うなづく

吉賀

「わかった」

▽吉賀 大倉の方を見る

吉賀

「僕が、するんで、小村君は 許してもらえませんか」

大倉

「なんのことかしら。したいって言ってるのは、川崎君の方よでも、私なら、吉賀君だけでもいいと思うわ」

三年生A（田中）

「その代わり、二人分の役を吉賀君がしてくれるなら、川崎君も満足するんじゃないかしら」

吉賀

「それでいい」

▽川崎 顔をあげて、吉賀の顔を見る

「ありがとう」

川崎

▽川崎 大倉の顔を見る

「約束ですよ」

川崎

「なんのことか判らないけど、了解したわ」

大倉

「さあ立って下さい」

吉賀

▽川崎 立ち上がる

吉賀

「見られていたら、できません。出ていってくださいか」

大倉

「いいわよ。みんな 終わるまで、隣の準備室にいきましょう」

▽大倉を含む 女子四人が 隣の準備室の方に入っていく

▽大倉 小村が まだ残っていることに気づく

大倉

「小村君、邪魔しちや悪いから、こつちで、待ってましょ」

小村

「吉賀、ごめん。俺、見れないや」

吉賀

「うん。わかった。終わるまで待ってて」

▽小村 準備室に入る

○準備室

大倉と、女子生徒六人がいる

大倉

「うまくいったわね。さあ板をどけて」

Copyright@2020 DS

▽一年生A（谷口） 年生B（小山）が、壁に立てかけてある ベニヤ板をどける

美術室が丸見えになる

ミラーがラスになっており、美術室からは見えないが、準備室からは美術室の中が良く見えるようになっていた

▽小村 準備室から美術室が丸見えなことに驚く

「え、これは、どういうこと」

「だって、待ってるだけって退屈でしょ」

「だからって」

「小村君には、退屈させないわよ」

▽大倉 小村の股間を握る

「や、やめてください」

▽三年生A（田中） 三年生B（中島） 小村の両脇に立ち、腕をがっちり掴む

「静に、あの二人を見てなさい」

大倉

小村

大倉

小村

大倉

小村

○美術室

吉賀、小村、川崎がいる

▽二人は、まだ立ったまま

(美術室のスピーカーから)

「俺、セックスってしたことなくて」

「じゃ、僕が、リードするね」

「吉賀君、君は」

「いいから、任せて」

▽吉賀 川崎に近づき、背伸びをする

顔を近づけ、川崎にキスをする

○(同) 準備室

「わ、やったわ」

二年生A (森下)

「シッ。静に」

○ (同) 美術室

▽吉賀 キスを止め、川崎の体を倒し、机に上半身を寝かせる

▽吉賀 川崎のズボンのベルトを緩め、カッターシャツのボタンを外していく

▽吉賀 カッターシャツを脱がす

川崎 Tシャツ姿になる

▽吉賀 川崎のTシャツを脱がす

▽吉賀 川崎の胸の辺りを舐め廻し、時々、乳首の先を舌でつつく

▽吉賀 川崎の学生ズボンの中に手を入れ、パンツの上から川崎の陰茎を揉む

「反応がいいね。机の上に寝ようか」

▽川崎 うなずき、足を机の上に上げ、仰向けで寝る

川崎

▽吉賀 川崎のズボンを脱がす

川崎 黒のボクサーブリーフで、パンパンに膨れている

▽吉賀 自身のカッターシャツ、Tシャツを脱ぎ、学生ズボンを脱ぐ

吉賀は、ランパンだけの姿になる

▽吉賀 机の上にあがり、川崎の両足を広げ、その間に座る

▽吉賀 川崎の上に体を倒し、再び、川崎の乳首を舐め始める

「あ、あう」

▽川崎 声が出る

▽吉賀 舐める場所を下に移動させていく

腹からヘソの周りを舐める

▽吉賀 ボクサーブリーフの上から、川崎の陰茎を舌でなぞる

「こんなに大きくしちゃって、窮屈でしょ」

▽吉賀 川崎のボクサーブリーフのずらす

吉賀

川崎の陰茎が飛び出てくる

○(同) 準備室

▽大倉、女子達 吉賀、川崎の行為を黙ってみている

▽小村 初めてみる男子同士のセックスに興奮し 勃起している

○(同) 美術室

▽吉賀 川崎の陰茎を口に含み、上下に扱く

「汚いよ」

▽吉賀 一旦、口を離す

「大丈夫」

「気持ちいい?」

「うん」

川崎

吉賀

吉賀

川崎

吉賀

「いきそつになったら、言ってね」

▽吉賀 再び、川崎の陰茎を口に含み扱く

○（同）準備室

同じ光景を見ているので飽きてきた女子達

三年生A（田中）

「ちょっと、早くすませてね。私たち、「こんなとこ」で終わるの待ってるのよ

三年生B（中島）

「そつよ、いつまで、ダラダラしてるの？ 早く、入れないさいよ」

○（同）美術室

吉賀

「しょうがない、早く終わらせるか」

川崎

「終わらせるって何を」

吉賀

「セックス」

川崎

「え」

吉賀

「入れたことある？」

川崎

「え？ 入れるって何？」

吉賀

「じゃ、僕がタチするね」

川崎

「タチって何」

吉賀

「川崎君は、そのまま寝てくれる。あとは、僕に任せて」

▽吉賀 川崎の穿いているボクサーブリーフ脱がす

▽吉賀 川崎の肛門の人に人差し指の先を入れる

川崎

「何、何するの？」

吉賀

「黙ってて。早く 終わらせよう」

▽吉賀 川崎の肛門に、ゆっくりと人差し指を入れていく

川崎

「あっ。あっ。」

吉賀

「気持ち良かったら、声を出していいからね」

川崎

▽吉賀 川崎の肛門に入れた指を 中で動かす

「あっ。あっ。」

吉賀

「そろそろいいかな」

▽吉賀 ランパンの裾から、自身の陰茎を取り出す

▽吉賀 陰茎をゆっくりと川崎の肛門の中に入れていく

川崎

「あ、あ、あ、あ」

○(同) 準備室

「キャー あの子達、す「おーい」

「信じられない」

「美少年同士のセックスって、美しいわ」

小村

「よ、よしが」

大倉

▽大倉 小村の声に気づく

「ごめんなさい。あっただけ楽しんでるのずるいわね」

▽大倉 小村のズボンのベルトを緩める

小村のズボンがスポンと下に下がる

小村の下半身は、トランクスで、立派なテントが張ってる

大倉

「こっちも、立派だわ」

▽大倉 小村のトランクスの中に手を入れ、小村の陰茎を握り、ゆっくりと抜く

小村

「せ、先生」

大倉

「先生に任せて」

○(同) 美術室

▽吉賀 腰を激しく動かしている

川崎

「あ、あ、あ、あ」

吉賀

「うっ、うっ、うっ」

吉賀

「い、いきぞう」

川崎

「俺、いきぞう」

▽吉賀 川崎の陰茎を扱きだす

吉賀

「いっしょにいこう」

川崎

「あ、あ、あ、あ」

吉賀

「うっ、うっ、うっ」

▽川崎 陰茎の先から、精液が飛び出す

▽吉賀 腰の動きがゆっくりになる

▽吉賀 川崎の上に倒れ顔を川崎の胸に付ける

○(同) 準備室

小村

「で、出る」

大倉

「いいわよ。あなたもいきなさい」

小村

「うっ」

○（同）美術室

▽川崎 自分の胸の上に寝ている、吉賀の頭を撫でる

川崎

「ごめん」

吉賀

「僕こそ、ごめんなさい」

川崎

「ううん。俺は、君に入れてもらえて、よかったと思ってる」

吉賀

「僕も。川崎さんのような、カッコイイ人と出来てよかった」

川崎

「そろそろ、起きよっか」

吉賀

「そうですね」

▽吉賀 机から下り、穿いているランパンを整える

▽吉賀 床に落ちている川崎のボクサーブリーフを拾い、川崎に渡す

▽川崎 吉賀からボクサーブリーフを受け取り、机の上で穿く

▽川崎 机から下りる

○準備室へ繋がるドアが開く

▽大倉 美術室へ入ってくる

「二人とも、お疲れ様」

▽女子生徒 ニヤニヤ笑いながら 美術室へ入ってくる

「二人とも 満足できたかしら」

▽小村 美術室へ入ってくる

「吉賀 大丈夫か」

大倉

三年生A (田中)

小村

吉賀

「うん。大丈夫」

大倉

「小村君も よかったでしょ」

小村

「いえ、俺は」

三年生B (中島)

「あんなに濃いの出しておいて」

大倉

「明日は、いよいよ、文化祭ね」

文化祭が終わったら、お待ちかねの打ち上げよ」

三年生A (田中)

「やったー」

大倉

「どうぞん。全員参加よ」

二年生A (森下)

「よかったわね。吉賀君、小村君」

大倉

「川崎君も、特別参加よ」

川崎

「お、俺も ですか」

大倉

「当然よ。それで、最後にしてあげる」

川崎

「本当に、本当に、ですネ」

大倉

「そうよ。美大の推薦チケットゲットね」

三年生A (田中)

「先生ずるーい。私だって推薦で行きたかったのに」

三年生B (中島)

「イメケンに甘いんだから」

大倉

「そんなつもりないわよ」

三年生A (田中)

「ところで、打ち上げて どこでするんですか」

大倉

「そうね。じゃ、先生が奮発して、みんなを、温泉につれて行ってあげる」

二年生B (近野)

「やったあ」

三年生A (田中)

「先生。いいんですか」

大倉

「いいわよ。だって、イケメン三人と一緒になんですもの」

三年生B (中島)

「当然、泊まりですよね」

大倉

「もちろん」

三年生B (中島)

「楽しみだわ」

▽大倉 小村、吉賀、川崎の方を見る

大倉

「あなたたちも、楽しみでしょ」

▽川崎 小村 不安な顔をする

▽吉賀 睨みつけている

○ (翌日) 文化祭の日

(ナレーション)

(文化祭当日、大倉の姿はなかった)

生徒A

「ねね、知ってる？ 美術の大倉が失踪したって」

生徒B

「職員室で噂がもちきりよ」

生徒C

生徒D

生徒E

(ナレーション)

「なんか、ホストクラブで、男狂いになってたって」

「マッチングで、結婚詐欺にひっかかったって聞いたわよ」

「ホストクラブで借金苦で、夜逃げだった」

(学校では、さまざまなウワサが 飛び交っていた

大倉は、古里の幼なじみと駆け落ちして、北海道で農場を営んでいたという事を知るのは、十年後の同窓会まで、誰も知らなかった)

◇ テロップ ◇

大倉先生のモデルとなった先生は、行方不明です。

なので、最後は、こうであって欲しいとの願いがあります。

(作者)

「私が工業高校に進学した理由 二学期」

# 第四話

夢雄  
美侶

---

サブタイトル「文化祭がはじまるよ」

本話について

あらすじ

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D<sup>3</sup>S

---

## □ 第一幕 今日文化祭

○（文化祭の朝） 姫磨工業高校 工業化学科の実習棟

今日は、いよいよ文化祭。

工業化学科 実習棟一階の第一実験室では、美優たち一年生が、早朝から喫茶店の準備に励んでいる。

ちなみに、二年生は、化学実験ショーを行うようで、三年生は、体育管を使い演劇とバンドを披露するようだ。

○一階の実習室の横の準備室

喫茶店をするため、オーブンなどを持ち込んできている

▽松子 オーブンから取り出したケーキを取り出し、ナイフで切り分けてる

「おいしぞう」

「中川さん、すごいや」

「ねえ、吉賀君ケーキの味見してくれる？」

美優

吉賀

松子

▽松子 ケーキの切れ端を爪楊枝で刺し、吉賀に渡す

▽吉賀 一口で食べる

「うん。美味しい。店で売ってるのと同じだ」

「よかった」

「ケーキ屋さんになれるね」

「花と小鳥がさええずる、喫茶店でもいいわね」

▽智美 準備室を覗く

「美優、松子、そろそろ着替えるわよ」

「はい」

「吉賀君、ちょっと着替えてくるわね」

「了解」

吉賀

松子

吉賀

松子

智美

松子

松子

吉賀

中野

生徒A

生徒B

▽美優、松子、智美 実習棟の中にある、女子更衣室へ行く

「おーい、午前担当の男子も早く着替えるよお」

「じゃ、着替えるとするか」

「俺、午後担当だから、教室で だべってくるわ」

▽部活の出し物で抜ける者もあり、だいたい十人前後で喫茶店を回すことになっっている

今回の衣装は、工業化学科らしく、全員 実習用の白衣を着ることにした。ただし、女子の三人は、メイド喫茶を意識しての、フリフリの水色のミニスカートにフリフリの白のブラウス、頭には、大きな赤のリボンのカチューシャ。これらは、すべて、ロリっ小島のコーディネートだ

### ○女子更衣室

智美

「ねね、見て。かわいい。小島って案外、イイセンスしてるわね」

松子

「一度、こんなの着てみたかったけど、さすがに 家では着れないし」

美優

「あの顔から、こんなファッションセンスが 生み出させるなんて、  
天は二物を与えずとは、言ったものね」

智美

「誉めているのか？ けなしているのか？」

美優

「あら、私としては 最大限 敬意を払ってるつもりよ」

松子

「もう、美優ったら」

智美

「美優は午後からブラバンの演奏に行くんでしょ」

美優

「そうなの。喫茶店にいたかったのにね」

松子

「私は、美優の演奏を聴きたかったわ」

美優

「ありがとう。終わったら、直ぐにもどって 手伝うわね」

▽美優、智美、松子 実習室に戻る

男子

「おおーっ」

智美

「ちょっと、タダ見は、だめよ」

小村

「夢前が、美少女アニメキャラに見えるよ」

男子A

「高谷さん、なんてセクシーなんだ」

智美

「ねえ、私たちだけって、不公平じゃない？」

中野

「なにがだい？」

智美

「私達だけが、コスプレみたいなことして、男子は、なにも無いの？」

中野

「でも、クラスで決めたことだし、当日に言われても」

智美

「じゃ、部活やってる人は、白衣の下は、部活のユニフォームってのはどう？」

部活のユニフォームなら、すぐに着替えれるでしょ」

中野

「それ、良いアイデアかもしれない」

小島

「おいおい、俺は、山岳部の、衣装か？ リュック背負うのか？」

智美

「心配しないで、顔面妖怪は、接客担当じゃないからしないから

着替えなくてもいいわよ」

美優

「智美　だめよ本当のこと言っちゃ」

男子A

「どっする？」

男子B

「どっする？」

小村

「まあ、確かに高谷がいうこともわかる。女子だけってのは、不公平だよな。頑張ってくれたんだから、男子もやろうぜ！」

男子C

「小村が言うなら　やるか」

と、言うことで、ウェイター役の男子は、白衣の下に部活のユニフォームを着ることに決まった。  
そんなこんなで、準備も整い、文化祭が始まった。

○工業化学科実習棟　入口付近

▽呼び込み役の生徒　来客に向かって呼び込みをしている

「いらっしやい、いらっしやい、美味しいケーキと、コーヒーの店ですよ」

男子A

男子B

「ねえねえ、いい子いるよ。寄ってきなよ」

なんかの、呼び込みと勘違いしている、男子もいる。

▽来客の女子中学生 三人人組

看板を見る、

女子中学生A

「へえ、ビーカーで飲むコーヒーだって。代わってる」

女子中学生B

「ちょっと、入ってみようよ」

女子中学生C

「そうだね」

男子A

「はい、カワイイ女の子、三人様、どうぞ」

〇一階 実習室

▽女子中学生 実習室に入ってくる

女子中学生A

「わあ、さすが高校だわ。中学校の実験室と全然違う」

男子B

「こちらのお席にどうぞ」

智美

▽女子中学生 席に着く

▽智美 女子中学生のいる席にやってくる

「いらしゃいませ」

▽女子中学生 智美の衣装を見る

女子中学生

「カワイイ」

女子中学生B

「おねえさん、きれえい」

智美

「ありがとうございます。あなたたちも、とってもカワイイわよ。  
初めてのお客さんだから、うんとサービスするわね  
今日の おすすめは、シフォンケーキのセットね」

女子中学生A

「じゃ、それにします」

智美

「ありがとうございます。シフォンケーキセット、三つ」

□ 第二幕 # おばちゃん二人 VS 小村 #

○ 工業化学科実習棟 前

おばちゃん A 「ちよつと、田中さん、休んで行きましょうよ」

おばちゃん B 「そうね、歩きすぎて疲れたわ」

男子 A 「どうぞ、イケメンのコスプレウエイターが、おもてなししますよ」

おばちゃん A 「コスプレですって。それもイケメン」

男子 A 「はい、白衣の下は、何を着てるか、お楽しみです。もしかして、

すっぽんぽんかも、しれませんよ」

「もう、おばちゃんをからかわないで。でも、見てみたいわね」

おばちゃん A 「じゃ、ここで、休憩しましょう。サービスしてね」

男子 A 「はい、はい、もちろん。美人の奥様四人です」

▽ おばちゃん四人 喫茶店になっている実習室に入る

智美

○おばちゃん二人組のテーブル

「いらっしやいませ。こちらにどうぞ」

▽智美 おばちゃんを席に案内する

おばちゃんB

「あら？ イケメンは？」

智美

「少々おまち下さい」

▽智美 準備室に戻る

智美

「ちょっと、男の子たち、出番よ」

小村

「じゃ、俺が行きます」

▽小村が、おばさんたちのテーブルに行く

小村

「いらっしやいませ。本日は、一年二組の喫茶店にようこそ」

おばちゃんA

「わっ、かわいい。食べてみたい」

おばちゃんB

「私は、あなたを、頂くわ」

おばちゃんA

「ちょっと、ちょっと お兄さんが困ってるわよ」

おばちゃんB

「え、本当にイケメンなんですもの」

おばちゃんA

「ところで、コスプレ喫茶なんですよ。その白衣の下は、何を着てるの？」

▽小村 白衣を広げ、バスケのユニフォーム姿を披露

おばちゃんA

「バレー？」

おばちゃんB

「違うわよ、バスケットボールよね」

小村

「正解です」

おばちゃんA

「バレーと どう違うの？」

小村

「一番分かり易いのは、シャツが、ランニングなんです」

おばちゃんA

「それじゃ見えないから 白衣を脱いでみて」

おばちゃん A

▽小村 白衣を脱ぎ、バスケット部のユニフォームになる

「ちよつと、腕を上げてみて」

▽小村 腕をあげる

おばちゃん B

「脇毛が、セクシーね」

小村

「あ、すみません」

おばちゃん A

「いいのよ、男の子だもの。脇毛生えてる方が、素敵よ」

おばちゃん B

「じゃ、下の方も、生えてるの？」

小村

「それは、ご想像に、お任せします」

おばちゃん B

「それは、見せてくれないのね」

小村

「申し訳ございません。ご注文をお願いします」

おばちゃん A

「え、ざんねん。じゃ。あなたのオススメを二つね」

小村

おばちゃんB

小村

おばちゃんB

小村

松村

小村

▽小村 準備室の方を チラ見すると、智美が、クッキーを見せる

「では、コーヒーと、クッキーの、セットでよろしいでしょうか」

「ええ、それでいいわ」

「では、失礼します」

「また、戻ってきてね」

▽小村 準備室へ戻る

○実習準備室

「ふう、疲れた。おばちゃんの相手って疲れるよ。持って行くときは、

松村 お願いな」

「え？ 僕？」

「頼むよ」

松村

「わかったよ」

(数分後)

松子

「はい、出来たわよ。運んで」

松村

「はい」

智美

「ちょっと待って。松村君、白衣は「こ」で脱いで行った時ほうがいいわよ」

松村

「え？ 恥ずかしいよ」

智美

「何言ってるの。部活の時は、白衣なんか着てないでしょ」

▽松村 白衣を脱ぐ

水泳部のユニフォームである競泳水着

智美

「じゃ、よろしく」

▽松村 準備室からおばちゃん達の待つテーブルに向かう

□第三幕 # おばちゃん二人 VS 松村 #

○おばちゃん二人組のテーブル

松村 「お待たせしました」

おばちゃんA 「きたきた」

▽おばちゃん達

松村の筋肉質な体つきと、もっこりが強調された競泳水着に目が点

おばちゃんB 「なに、その格好」

松村 「すみません、すぐに、服を着ます」

おばちゃんB 「違うの、とっても、素敵よ。おばさんたち、最高よ」

松村 「ありがとうございます」

おばちゃんB 「もうちよっと、こっちにきて」

▽松村 おばちゃんの近くに

おばちゃん A

おばちゃん B

おばちゃん A

松村

おばちゃん A

松村

おばちゃん A

▽おばちゃん 松村の競泳水着のモツコリした部分を指差す

「ここには、何か入っているのかしら」

「田中さん、ちょっと、触らせてもらったら？」

「そう？ じゃ」

▽おばちゃん A 松村のもっこりした部分をつつく

“ツンツン”

「あ、止めてください」

「え、なんか、恥ずかしい物でも入ってるの？」

「それは」

「もう、じれったいわね」

▽おばちゃん A 松村の前に来て

手で、松村の股間を揉む

おばちゃん A

「ごうよ」

松村

「や、やめて、ください。困ります」

おばちゃん A

「私達、全然、こまりません」

▽松村 コーヒーの乗ったおぼんを机の上に置く

おばちゃん B

「ちょっと、私はまだなのよ」

▽松村 軽く 会釈をして去って行く

○準備室

▽松村 戻って、白衣を羽織る

松村

「僕、もう、無理」

滝本

「しょうがないなあ、今度は、俺が行って、ピシッと行ってやるよ」

智美

滝本

智美

滝本

「はい、次はこれを六番に運んで」

「じゃ、俺が行ってくる」

「滝本君、気をつけて」

「ああ」

Copyright@2026 D'S

□ 第四幕 # 青年 VS 滝本 #

▽ 滝本 六番テーブルに飲み物とケーキを持って行く

○ 六番テーブルの席

三十手前の男性が座っている

「お待たせいたしました」

「お、きたきた」

▽ 滝本 机の上にケーキと飲み物を置く

「ありがとうございます。君は、ラグビー部だね」

「はい」

「ラグーシャツ着てるから、すぐわかるよ」

「そうですよね」

「胸板もあるし、足も筋肉が付いて太いね」

滝本

男性

男性

滝本

男性

滝本

男性

滝本

「そうですね」

男性

「そういえば、ラグビーって、パンツ穿かないって本当なの」

滝本

「練習中は穿きますけど、試合の時は、穿かないようにしていますよ」

男性

「あれは、まじだったんだ」

滝本

「でも、最近では殆どの学校では、スパッツみたいな穿いてますけど、うちのような古くからの学校は、伝統を守ってますね」

男性

「じゃ、今の君は」

滝本

「俺ですか。今は、穿いてませんよ。こういう大事な行事のときは、身を引き締めるため、下着を穿かない事にしました」

男性

「穿いてないの？」

滝本

「はい」

男性

「証拠見せて」

滝本

「いえ、それは・・・」

男性

「いいじゃないか。男どうしだろ」

▽男性 滝本のラグビーパンツの中に強引に潜りこませる

滝本

「あ、ダメです」

▽男性 滝本のラグビーパンツの中に手を突っ込み、中をまさぐってる

男性

（女の子のような話し方で）「本当だわ。穿いてない」

▽滝本 男性の手を抜こうとする

（女の子のような話し方で）「まだ だめよ」

▽滝本 男性の手を取り出す

（女の子のような話し方で）「もう、気持ちよくさせてあげたっかつのに」

滝本

「しゅっくしゅ」

▽滝本 会釈してその場を離れ、準備室に戻る

智美

「大丈夫だった」

滝本

「俺も、もう無理。あんなの相手にできない」

（イケメン喫茶 大繁盛中）

○（数時間経過）昼過ぎの 第一実習室

昼時となり、客がいなくなった

中野

「今のうちに、交代で昼飯にでもしようか。先に女子から、行ってくれるかい？」

智美

「私達は、松子の焼いてくれたケーキをここで食べるから大丈夫よ。

それより、男子の方が、お腹空いてるでしょ」

中野

「ありがとう。じゃ男子も、昼飯に行ってくれるかな。

あと、誰か、教室にいる午後のチームを呼んできてくれるかな。

それまでは、僕と、小村と、吉賀の三人でがんばっておくよ」

滝本

「オッケー 中野」

美優

智美

美優

中野

松子

中野

▽滝本 他、数人の生徒が、第一実験室から出ていく

小村 吉賀 中野 の男子三人と

美優 智美 松子 の女子三人が残っている

「ごめん。私、午後一でプラスバンド部の演奏があるの」

「そっか、今日の美優は忙しいよね」

「終わったなら、みんなの分もがんばるよ」

▽美優 準備室から出て行く

「よし、午後のメンバーが来るまで、頑張ろう  
幸い、人も少ないし、なんとかなるだろう」

▽松子 シフォンケーキを持ってくる

「少しは、お腹が満たせるわよ」

「ありがとう。いただくよ」

Copyright@2020 DS

▽中野 小村 吉賀 ケーキを食べる

Copyright@2026 D<sup>3</sup>S

□ 第五幕 # おばちゃん四人組 VS 吉賀 #

○ 第一実習室（今は、喫茶店）

▽ 智美 客が来るのを待っている

▽ 女（幸子）と 男 が入ってくる

幸子は、中学の時の智美のクラスメート  
智美を虐めていた

▽ 智美 幸子の姿を見て驚く

幸子の方は気がついていない

▽ 智美 準備室に逃げ込む

○ 準備室

▽ 松子 急に智美が戻ってきたことに驚く

「智美、どうしたの」

「え、えっと。野球部の準備に呼ばれたの忘れてたの

松子

智美

急いでいかなくちや」

「そうなの。じゃ、早く行っておいでよ」

「ごめん、しばらく 店の方お願いするわね」

「任せておいて」

▽智美 準備室の別の扉から出て行く

「高谷さん、慌ててたね」

「そうみたいね。よっぽど 何かあったのね」

○第一実習室の扉

▽入り口から、年配女性四人が入ってくる

「ここね。田中さんが、教えてくれた店つてのは」

▽中野 おばちゃんの前に立ち

おばちゃん A

松子

智美

松子

吉賀

松子

中野

「いらっしやいませ。「こちらにどうぞ」

▽中野 奥の角のテーブルに案内

おばちゃん A

「なんや？ あんたが、イケメンか？ ちょっと、聞いてることと違うやない？」

中野

「あいにく、イケメンたちは、お昼に行ってしまいました」

おばちゃん B

「せっかく、来たのに」

おばちゃん C

「私なんか、イケメンがいるからって聞いて、パートを早く切り上げてきたのよ  
どうして、くれるの？」

中野

「申し訳ありません」

おばちゃん C

「謝ってすむ問題じゃないわよね」

▽吉賀 中野のところに来る

吉賀 学生服（カッターシャツと黒の長ズボン）の上に白衣を着ている

吉賀

「中野くん、どうしたの？」

おばちゃん A

「あら、ちゃんとイケメン、いるじゃないの」

おばちゃん B

「ほんと、ほんと、アイドルみたい」

おばちゃん C

「決めた。アナタで、いいわ」

吉賀

「中野くん、ここは、僕に任せて」

中野

「わかった。ありがとう」

▽中野 準備室に戻って行く

吉賀

「では、お嬢さま方、ご注文を、お聞かせいただけますか？」

おばちゃん A

「まあ、お嬢さま ですって」

おばちゃん B

「でも、注文を聞く前に、することあるでしょ？」

吉賀

「なんででしょうか？」

おばちゃん B

「もう、ここは、コスプレ喫茶って、田中さんから、聞いたのよ。あなたの服装は博士かしら」

吉賀

「僕は、調理を担当しているので、こんな格好なんです」

おばちゃん C

「え、あなたこそ、接客しなさいよ」

おばちゃん D

「今は、ウェイターでしょ」

吉賀

「確かに、そうですが」

おばちゃん D

「じゃ、コスプレをしてみせて」

吉賀

「でも、準備が」

おばちゃん A

「それじゃ、パンツ一枚になってくれてもいいのよ」

吉賀

「さすがにそれは」

おばちゃん A

「あら、なに、サービス悪いわね。田中さんは、パンチ一枚で接客してもらったって聞いたわよ。ここは、客を選ぶのね」

吉賀

「それは、ないのですが」

○準備室

▽松子 準備室の扉から吉賀のことを伺っている

「どうしよう、美優も智美も部活の方、応援に行っちゃったし、中野君と小村君も、ちょうどバスケ部の応援に行ってしまったわ」

▽松子 急いで、吉賀の元に行く

○おばちゃん四人組の席

「お客様、困ります」

「なあに、あなた？」

「こんなこと、されては、風紀が乱れます」

「それに、さっきは、別の客には、コスプレのサービスをして、私たちには出来ないの？ この店は、客を選ぶの？」

「それは・・・」

松子

松子

おばちゃんB

松子

おばちゃんC

松子

吉賀

「中川さん、もういいいよ。お客様の言う通り。差別なんて、しては、ダメだよ。ここは、僕が、対応するから」

松子

「大丈夫」

吉賀

「心配しないで」

松子

「わかった」

おばちゃん A

▽松子 準備室に戻り、扉から様子を伺っている

「邪魔者が消えたから、早く脱いで」

▽吉賀 白衣を脱ぎ、空いている机の上に置く

下はカッターシャツを着ている

▽吉賀 カッターシャツのボタンを外し、カッターシャツを脱ぎ、机の上に

▽吉賀 Tシャツを脱ぎ机の上に

吉賀の色白の華奢な体をさらす

おばちゃんB

「わお！ 素敵」

おばちゃんC

「悔しいくらい、綺麗だわ」

おばちゃんD

「早く 下も」

▽吉賀 ズボンのベルトに手をかけ ベルトを外す

ベルトを緩めると、ズボンが、ストンと落ち、  
体操服のランニングパンツだけの姿になる

おばちゃんA

「あら？ カッコいいの履いてるわね」

おばちゃんB

「あなた、陸上選手だったの？」

吉賀

「いいえ、これは、学校の体操服なんです」

おばちゃんB

「そうなの、今どき、そんなに丈が短いのって、珍しいわね」

吉賀

「案外軽くて、履きやすいんですよ」

おばちゃんB

「そうなの」

おばちゃんD

「確かに軽くて、涼しそうだけど、ちよつと、前の膨らんだところが、気になって、しかたないわ」

おばちゃんA

「これって、箱根駅伝で大学生が穿いてるやつかしら」

吉賀

「そうですね」

おばちゃんA

「私、見てて、前から気になってた事あるんだけど  
その下って、どうなってるの？ 走つてるときに、中が見えたりしないの？」

吉賀

「大丈夫ですよ。ちゃんと、中にインナーパンツが付いていて、見えないようになってます」

おばちゃんA

「へえ、ちよつと、見せて？」

吉賀

「どうぞ」

▽吉賀 おばちゃんAに、ランパンの裾をめくり、下のサポーター部分を見せる

おばちゃんA

「ほんとう。残念。見えないのね」

おばちゃんB

「もう、山田さんたら。見えちゃ困るじゃないの」

おばちゃんC

「生地が、とっても薄いようだけど、何でできてるのかしら？」

吉賀

「さあ、汗を蒸発させやすい生地だと思うのですが」

おばちゃんB

「せっかくだから、触らせてもらったら？」

おばちゃんC

「あら、恥ずかしいわ」

おばちゃんB

「何言ってるの。今しかできないわよ」

おばちゃんC

「そうね。ちょっと、触らせてくもらるかしら」

吉賀

「はい」

▽吉賀 おばちゃんCの方に行く

「どうぞ」

吉賀

▽おばちゃんC 吉賀のランニングパンツ裾の生地を指で挟み手触りを確認

おばちゃんC

「薄いわね。こんな生地だから、ここが、大事なところが、右に向いてるのが、

おばちゃんD

吉賀

まるわかりね」

「そんなに薄いの。私も触っていいかしら」

「どうぞ」

▽おばちゃんD 吉賀のランニングパンツの上から、膨れた部分をわしづかみ

吉賀

「え」

「本当 とっても薄いわ」

▽おばちゃんD 吉賀の陰茎をランニングパンツの上から揉みまくっている

吉賀

「あの、そろそろ注文を」

▽おばちゃんD 手を離す

「あら、ごめんなさい。あんまり あなたがカワイイので、注文を忘れてたわ」

おばちゃんA

「じゃ、私は、ホットコーヒーで」

おばちゃんB

「私も。私は、ミルクを付けてね」

おばちゃん C

おばちゃん D

吉賀

「私もコーヒーでいいわ」

「ホットコーヒー四つね」

「かしこまりました」

▽吉賀 準備室の戻って行く

○準備室

松子

「吉賀君、大丈夫」

吉賀

「平気、平気。中川さん コーヒー四つね」

松子

「はい」

▽松子 コーヒーメーカーでコーヒーを作る

松子

「はい 出来たわ」

吉賀

「じゃ、持って行ってくるね」

松子

「吉賀君、服を着たら」

吉賀

「だめだよ。服を着て行ったら、何を言われるか。それに、服は机に置いてきてしまったんだ」

松子

「気をつけてね」

吉賀

「心配しないで」

▽吉賀 準備室から出て、おばちゃん四人組の席に向かう

○おばちゃん四人組の席

吉賀

「お待たせしました」

おばちゃんA

「来た来た」

▽吉賀 コーヒーをおばちゃん達の側に置いていく

▽吉賀 コーヒーを全て 配り終わる

吉賀

「それでは、「ゆっくりと」

▽吉賀 その場を離れようとする

おばちゃんC

「ちょっと待って」

吉賀

「他に、何か注文ですか」

おばちゃんC

「そうじゃないわ」

吉賀

「なんででしょうか」

おばちゃんD

「私達 もう少し 聞きたいことがあるのよ」

吉賀

「はい」

おばちゃんD

「そのパンツって、もっとり目立つけど気にならないの」

吉賀

「これですか。履き慣れてるので、僕は、気になりませんね」

おばちゃんC

「気にならないですって、よっぽど、自信があるのね」

おばちゃん A

「そんなに 目立ってるのよ」

吉賀

「はい 大丈夫です」

おばちゃん B

「ねえ、もっと大きくなったら、恥ずかしいでしょ」

吉賀

「そうなんですかね」

おばちゃん C

「ですって。じゃ、恥ずかしいかどうか、確認してみない」

おばちゃん D

「どうやって」

おばちゃん C

「ちょっと こっちにいらっしやい」

▽吉賀 おばちゃんCの所に行く

おばちゃん C

「もっと近くにきて」

▽吉賀 おばちゃんCに もっと近づくと

椅子に座ってる おばちゃんCの顔の高さに、吉賀のもっさりした部分

▽おばちゃんC 吉賀のランニングパンツの上から 陰茎の部分を擦りだす

吉賀

「何をするんですか」

おばちゃんC

「大きくなっても、恥ずかしくないか 確認するのよ」

吉賀

「止めてください」

▽吉賀 おばちゃんCから離れようとする

▽おばちゃんD 後ろから吉賀の体を押さえる

おばちゃんD

「ダメよ 動いちゃ」

吉賀

「マジで、止めてくれませんか」

おばちゃんC

「あら、固くなってきてるわよ」

▽おばちゃんA おばちゃんB 席を立ち上がって 吉賀の下半身を見る

▽おばちゃんC 吉賀の陰茎部分を 握って縦にする

ランニングパンツがテントを張ったように見せる  
「本当、すごいじゃない」

おばちゃんA

おばちゃんC

吉賀

「どう、これでも 恥ずかしくないの」

「はい」

おばちゃんC

「結構 強情ね」

▽おばちゃんC 吉賀のランニングパンツの上から陰茎部分を舐め出す  
ランニングパンツが濡れ、生地が陰茎に張り付く

おばちゃんC

「ほら、あなたの亀さんが よくわかるわよ」

おばちゃんA

「ちょっと、透けて、筋が見えるじゃない、やらしい」

吉賀

「わかりました。恥ずかしいです」

▽おばちゃんC 吉賀のランニングパンツ舐めるのをやめる

おばちゃんC

「おばちゃん、素直な子が好きなのよ」

▽おばちゃんD 吉賀を離す

吉賀

「では、「ゆっくり」

おばちゃんB

「あー」

おばちゃんA

「どうしたの 大声出して」

おばちゃんB

「ちょっと、私、ミルクも頼んだわよね」

吉賀

「すみません。直ぐ取ってきます」

おばちゃんB

「取りに行かなくてもいいわよ。直ぐに出してくれるなら」

吉賀

「どういうことですか」

おばちゃんA

「もう、何する気」

おばちゃんB

「ちょっと、こっちへいらっしやい」

▽吉賀 おばちゃんBの所へ

おばちゃんB

「あなたのミルクを入れてちょうだい」

吉賀

おばちゃんB

「ミルクって」

「鈍いわね。ここに 沢山入っているでしょ」

▽おばちゃんB 吉賀のランニングパンツの上から陰茎を握る

吉賀

「それは、勘弁してください」

おばちゃんB

「だめよ。ミルク忘れた あなたが悪いの」

吉賀

「さすがに、それは」

おばちゃんB

「大丈夫。直ぐに出してあげるから」

▽おばちゃんB 立ち上がり、吉賀ランニングパンツの裾から中に手を入れる

吉賀

「何を」

▽おばちゃんB インナーパンツをめくり 吉賀の陰茎を直に握る

おばちゃんB

「固いわ。主人のと大違い

吉賀

▽おばちゃんB ランニングパンツの中の陰茎を扱きだす

「あつ あつ、や、やめて」

▽吉賀 腰を振っている

おばちゃんB

「あなたも、してほしがってるじゃないの」

おばちゃんA

「沢山出るように、私も手伝うわ」

▽おばちゃんA 立ち上がり、吉賀の乳首を吸い出す

吉賀

「あ、やばい、いく いく」

▽吉賀 足ががくつく

▽おばちゃんB ゆっくりと陰茎を絞る

▽吉賀 息があら

太股に粘液が流れてくる

▽おばちゃんB 吉賀の出した粘液をコーヒーカーップで受ける

おばちゃん B

「いっぱい ミルクを出したじゃない」

▽おばちゃん B コーヒーと吉賀の出した粘液をスプーンで混ぜ飲む

おばちゃん B

「うーん この青臭いの最高だわ」

おばちゃん D

「ちょっと、あなたたちだけずるいわよ」

おばちゃん C

「そうよそうよ」

おばちゃん D

「私たちにも ミルクを入れてちょうだい」

吉賀

「もう、無理です」

おばんちゃん A

「え、若いんだから、まだまだ いけるでしょ」

吉賀

「いえ、本当に」

おばちゃん C

「わかったわ。じゃ、もう一回だけでいいから ミルクを出して」

吉賀

「無理ですって」

おばちゃんD

「大丈夫よ、私たちの熟女のテクニクで いかせてあげるから」

おばちゃんC

「ちょっと この上に寝てくれる」

吉賀

「机の上ですか」

おばちゃんC

「そうよ。その方が、やりやすいもの」

おばちゃんD

▽吉賀 ためらっている

おばちゃんD

「さあ 早く」

おばちゃんD

▽吉賀 シューズを脱ぎ 机に仰向けになって寝る

おばちゃんD

「両手は上に上げて

おばちゃんD

▽吉賀 両手を上に上げる

うっすらと脇毛が見える

おばちゃんA

「こんなカワイイ子でも、ワキ毛が生えてるのね」

おばちゃんB

「もう、可愛くて、「うしちゃう」

▽おばちゃんB 吉賀の両脇に、自分の手を入れ吉賀のワキ毛の感触を楽しむ

おばちゃんC

「ちょっと、今度は、私たちが楽しむ番よ」

▽おばちゃんC 吉賀のランニングパンツの膨らみを見る

おばちゃんC

「右寄りなのね」

▽おばちゃんC 吉賀のランニングパンツの裾から手を入れ陰茎を握る

おばちゃんC

「もう、こんなに大きくなってるといけないの」

▽おばちゃんC インナーから吉賀の陰茎を取り出す

吉賀のランニングパンツは、見事なテントを張る

おばちゃんD

「すごい。なんて長いのに」

▽おばちゃんC 吉賀の陰茎をランニングパンツの中で扱きだす

吉賀

「あっ あっ あっ」

おばちゃん A

おばちゃん D

吉賀

おばちゃん C

吉賀

吉賀

▽吉賀 扱くりズムに合わせて、声を漏らす

「嫌だ、この子 すぐ感じてるじゃない」

「もっと、感じさせてあげるわね」

▽おばちゃん D 吉賀の乳首を舌でつつき、舐め、吸い出す

「あーっ」

「そろそろ、ミルクも暖まったかしら」

▽おばちゃん C 激しく扱きだす

「あうっ、い、いく」

▽吉賀 尻が高く浮くが

ランパンの先端から粘りけのある液体が、滲み出てくる

(ハア、ハア……)

Copyright@2026 DS

おばちゃんC

▽おばちゃんC ランニングパンツの中に入れてある手の甲に、  
吉賀の粘液が伝わり流れてくる

▽おばちゃんC 吉賀のランニングパンツから手を取り出す

「どう。気持ちよかった」

▽吉賀 無言

▽おばちゃんD 吉賀のランニングパンツの上から陰茎を揉む

(グチヨ、グチヨ と音がする)

▽おばちゃんD 吉賀のランニングパンツのウエストバンドをつまみ持ち上げ  
中を覗く

「いっぱい出したわね」

「私も見せて」

▽おばちゃんA 覗きにくる

おばちゃんD

おばちゃんA

おばちゃん A

「めっちゃ 毛に絡んでるわ」

吉賀

「これで、いいですか」

おばちゃん A

「いいわよ。とっっても楽しめたわ」

▽吉賀 机から下りる

別の机に置いてあった、服を持ち準備室へ戻る

○準備室

松子

「吉賀君、大丈夫」

吉賀

「うん。大丈夫」

松子

「これ、使って」

▽松子 お湯で濡らしたタオルを渡す

吉賀

「ありがとう」

▽吉賀 タオルで 腹や、胸を拭く

○準備室の扉が開く

▽智美 戻ってくる

「松子 ごめん 待たせて」

「遅いよ。吉賀君が大変だったんだから」

「吉賀君がどうかしたの」

▽智美 吉賀の方を見る

上半身裸で、ランニングパンツは、精液で汚れている

「え、何があったの」

「それが」

「僕、部室棟で、シャワー浴びてきていいかな」

「ええ そうした方がいいわ」

智美

松子

智美

智美

松子

吉賀

松子

吉賀

「じゃ、ちょっと行ってくる」

▽吉賀 準備室から出て行く

▽松子 心配そうな顔をしている

松子

「智美、ちょっとだけ、店番頼むわ」

智美

「いいよ、松子、ゆっくりしてきな」

▽午後担当の男子生徒が入ってくる

生徒A

「よっしゃ、午後からは俺たちに任せておけ」

▽智美 松子の顔を見る

智美

「ほら、大丈夫だから ちゃんと吉賀君を見てあげるのよ」

松子

「智美 ありがとう」

▽松子 準備室から出て行く

□ 第六幕 滝本と小雪の出会い

(数分後)

○ 準備室

おばちゃん四人組も帰り、平安な実習室  
午後から担当の男子生徒と、滝本が待機している

「すいません」

(第一実習室の方から声が聞こえる)

「あら、お客さんだわ」

「俺が行くよ」

▽ 滝本 お盆に水の入ったコップを乗せ実習室に向かう

○ 女性一人が座っている机

▽ 滝本 女性に近づく

小雪

智美

滝本

滝本

「いらっしやいませ」

小雪

「ああ、よかった。もう、終わったのかと、思ったわ」

▽滝本 女性がとても綺麗で見とれてしまう

小雪

「ねえ どうかしました？」

滝本

「え、あ、はい。あまり綺麗な人なんで」

小雪

「もう、学生さんが、大人をからかっちゃダメよ」

滝本

「いえ、ほんとうです」

小雪

「冗談でも こんな若い人に言われるなんて、光栄だわ」

滝本

「冗談ではないです」

小雪

「ありがとう」

滝本

「ご注文をどうぞ」

小  
雪

「何が、いいかしら？ あなたは、何が好き？」

滝  
本

「俺？ 僕ですか。僕は、コーヒーは飲まないですけど、このコーヒーは、超お奨めですよ」

小  
雪

「どうして お奨めなのかしら」

滝  
本

「日本で絶対買えないコーヒー豆を使ってるんです」

小  
雪

「おもしろいわ。日本で売ってないコーヒーが、飲めるなんて」

滝  
本

「本当です。クラスメートに外交官の息子がいて、そこから仕入れたんです」

小  
雪

「すごいね。じゃ、それを二つ」

滝  
本

「二つですか？」

小  
雪

「そう、あなたの分。一緒に飲んでくれないかしら？」

滝  
本

「いいんですか？ 俺なんかと」

小雪

「ええ、お願い」

滝本

「かしこまりました」

小雪

「それと、お願いがあるの。あなた、ラグビー部でしょ」

滝本

「どうして 判るんですか」

小雪

「だって、白衣の間から、ラグーシャツが見えてるじゃない」

滝本

「本当だ。すごく簡単でしたね」

小雪

「次、運んで来るときは、白衣を脱いで ラグーマンの姿でお願い」

滝本

「どうしてですか」

小雪

「理由は、運んで来たときに話すわ」

▽滝本 準備実に戻る

滝本

「コーヒー二つ」

智美

「一人なのに二つ？」

滝本

「一つは俺の分だそうだ」

智美

「なんで、滝本君と、飲みたいのかしら？」

滝本

「さあ」

智美

「また、体が、目当てなのかしら。滝本君で、筋肉室で、刺さる人にはささるから」

▽智美 コーヒーをカップに注ぐ

▽滝本 白衣を脱ぐ

ラグーシャツと、ラグビーパンツの姿に

智美

「どうして 脱ぐの」

滝本

「あの人が、俺のユニフォーム姿を見たいっていうから」

智美

「やっぱり、あの女も変態なのね」

滝本

「まさか？ あんな綺麗な人が？ でも あの人なら、いいかな」

智美

「はいはい、出来たから、行っといで」

▽智美 滝本にお盆を渡す

▽滝本 準備室を出て、小雪が待っている机に向かう

○小雪が座っているテーブル

▽滝本 やってくる

「お待たせしました」

▽小雪 滝本のユニフォーム姿を見る

「ありがとう。私のお願ひ聞いてくれたのね」

「はい。あ、でも、ここはイメケン コスプレ喫茶なので」

「自分の事をイメケンって言うのね」

「すみません。俺って、全然 いけてないですよね」

滝本

小雪

滝本

小雪

滝本

小雪

「うそ。とつても イケメンよ。  
じゃ、横に座って、一緒にコーヒーを飲んでくれる」

滝本

「はい」

▽滝本 小雪の横の椅子に座る

小雪

「ありがとう。私のような人の話相手になってくれて」

滝本

「いえ、俺も、こんな綺麗な人と話せるなんて、ラッキーです」

小雪

「ラグビーは、おもしろい？」

滝本

「はい。楽しいです。なんたって、一年からレギュラーになりましたから」

小結

「すごい。こここの高校のラグビー部は、強いのに、もうレギュラーなのね」

滝本

「ええ。練習、無茶くちや がんばりました っつてのはウソで、  
部員が少なくて、全員レギュラーなんです」

小雪

（笑う）

小雪

「ごめんなさいね」

滝本

「いえ、でも、強いのは本当ですよ。昔は、すごく弱かったって先輩から聞いたのですが、ある時、すごい先輩が来てから、一気に強くなった」

小雪

「そうなの」

滝本

「だから、部員みんなは、その伝説の先輩に負けないように、練習に励んでいるんです」

小雪

「そうなの でも無理はしないでね」

滝本

「え？」

小雪

「ほら、この足の怪我の跡」

▽小雪 滝本の太股にある大きな傷跡を指差す

滝本

「ああ、敵の体当たりで、そのまま転けたら、骨が折れて。この時は、骨も見えて、俺もうダメ！って思いましたよ」

小雪

「ほらほら、危ない。気をつけてよ」

滝本

「なんで、俺の事、心配してくれるんですか？」

小雪

「はは、ごめんなさい。不気味よね。こんな、おばさんが」

滝本

「いえ、おばさんじゃないです。最初、俺の顔を見たときは、楽しそうだったけど今は、悲しそうに見えます」

小雪

「そう、顔にでちゃうのね」

滝本

「どうしたんですか」

小雪

「あなたと話していたら、昔のこと思い出しちゃった」

滝本

「昔のこと」

小雪

「私も夫も、ここの学校の生徒だったの。そして、彼はあなたと同じラグビー部の選手だったの

私が、自転車で転けて、気がつくとき、あの人の膝を枕にして寝ていたわ。

暑さでやられたね。まだ、動かない方がいいよ。と、言って、いつまでも膝の上に

そして、同じ様に 太股に大きな傷があった。私、その傷を何度も撫でてたわ」

滝本

「俺と似ているんですかね」

小雪

「もう一つ、お願いを聞いてくれる」

滝本

「なんですか」

小雪

「あなたの膝で少しだけ、横にさせて」

滝本

「俺でいいんですか？」

小雪

「ええ、だって、あの人の若い頃に、そっくりなんですもの。  
たまたま通ったのも、何かの縁かもしれないわ」

滝本

「俺でよければ、どうぞ」

小雪

「ありがとう」

▽滝本 膝の上をあける

▽小雪 頭をかがめ、滝本の太股の上に頭を置く

小雪

「ああ、あの時と同じだわ」

▽小雪 滝本の太股にある傷を撫でる

小雪

「あの時と同じ」

▽滝本 小雪に太股と撫でられ、股間が反応しはじめる

▽小雪 頭を起こす

滝本

「すみません、こいつが、反応してしまっ

小雪

「いいのよ。あの時と、何もかも一緒だわ」

滝本

「え？」

小雪

「あの人も、そうだったのよ」

滝本

「すみません」

小雪

「あはは、本当に今日は、ありがとう。楽しかったわ」

滝本

▽小雪 立ち上がる

「え？ もう、帰るんですか」

小雪

「これ以上いたら、あの人のことを もっと思い出しそうで」

滝本

「わかりました」

今度

「今度、会うことが出来たら、あなたの願い事、叶えるわ。

これは、あの人に始めてあった日に、あの人に言った言葉よ」

滝本

「俺、きっと、また会えると信じてます」

小雪

「ありがとう」

▽小雪 実習室から出て行く

□ 第七幕 ついに吉賀と松子が

○ 部活棟のシャワールーム

▽ 吉賀 シャワーブースでランニングパンツを穿いたままシャワーを浴びている

▽ 松子 シャワー室の扉を開けて入ってくる

▽ 松子 シャワー浴びている吉賀の側にくる

「吉賀君」

▽ 吉賀 声に気づき、後ろを見る

「どうしたの？ 中川さん」

「心配で見に来ちゃった」

「大丈夫だよ」

「吉賀君が、大丈夫でも、私が大丈夫じゃないの。本当に、本当に、心配したんだから」

松子

吉賀

松子

吉賀

松子

吉賀

▽松子 シャワーを浴びている吉賀に抱きつく

シャワーの湯が、松子にかかり、松子のメイドの衣装が濡れる

「ごめん、心配かけちゃったね 中川さん」

松子

「本当に、本当によ」

吉賀

「うん。わかった。ほらほら、汚れるから離れて」

松子

「吉賀君のだから、汚れじゃないわ」

▽松子 吉賀をシャワー室の奥におし、吉賀を、壁にもたれさせる

膝を立て、顔を吉賀のランニングパンツの前にもってくる

▽松子 ランパンの上から、吉賀の膨らんだ部分を口で啜えた

吉賀

「中川さん、そんな事しちゃだめだ」

松子

「松子って呼んで」

▽松子 吉賀のランニングパンツの上から手を入れ、直に握り優しく扱く

吉賀

「松子ちゃん、そんなことしちやダメだって」

松子

「いやよ。あんな おばさんにだけに いかされるなんて。私だって、私だって」

吉賀

「松子ちゃん」

▽松子 吉賀の陰茎を一生懸命扱っている

(しばらく)

「うっ」

吉賀

▽吉賀 松子の頭を抱え、腰を突き出す

「き、気持ちいいよ。松子ちゃん」

吉賀

▽松子 ランニングパンツをずらし、吉賀の陰茎を取り出し壁に向かって抜く

「い、いく うっ」

吉賀

▽松子 吉賀の精液が顔にかかる

▽吉賀 松子の頭を持ち上げ、立たせるようにする

▽松子 立ち上がる

▽吉賀 松子の顔についた精液を、手で拭い その手で、松子の頬をはさむ  
ゆっくりと、顔を近づけ、キスをする

▽松子 吉賀 キスをしたまま硬直

▽吉賀 キスをやめる

「吉賀君」

「松子ちゃん」

▽吉賀 手を松子の陰部を触る

「それは、ダメよ」

「ごめん、つい」

松子

松子

松子

吉賀

松子

「体育の先生に、ちゃんと、付けるようにいわれてるでしょ」

吉賀

「じゃ、もう一度」

▽吉賀 松子に顔を近づける

▽吉賀 松子 キスをする

(数分後) ○第一実習室

すでに喫茶店は終了し、片付けをしている

▽松子 吉賀 制服に着替え 実習室にもどる

美優、智美が片付けをしていた

松子

「ごめん、おそくなっちゃた」

美優

「松子 心配してたよ。どこ行ってたの」

松子

「どっつて」

吉賀

「中川さん、僕、男子の片付け手伝ってくるね」

松子

「うん」

▽吉賀 その場を離れる

美優

「しかも、自分だけ着替えてるし」

松子

「だって、恥ずかしかったんだもん」

美優

「もう、心配してたの損しちゃった」

智美

「何言ってるの。美優だって、部活に行っただけだったじゃない」

美優

「あ、そうか。じゃ、調理器具の片付けお願いするわ」

松子

「任せておいて」

▽美優 他の片付けあるので去っていく

▽智美 松子の側にやってくる

智美

「どっだった」

松子

「秘密」

そんなこんなで、文化祭も、無事終了しました。

Copyright@2026 D<sup>3</sup>S

「私が工業高校に進学した理由 一学期 前編」

後編へ続く

Copyright©2016 D<sup>3</sup>S